

SENDプログラム 2016年度派遣実施報告書

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール

ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

インドネシア大学スプリングスクール

アジア研究教育ユニット (KUASU)

国際高等教育院 (ILAS)



SEND プログラム 2016 年度派遣実施報告書

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール

ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

インドネシア大学スプリングスクール

アジア研究教育ユニット (KUASU)

国際高等教育院 (ILAS)

目次

はじめに	iii
1 SEND プログラム.....	1
1.1 概要	1
1.2 SEND 準備.....	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講.....	1
1.2.2 情報共有.....	3
2 実施状況.....	4
3 チュラーロンコーン大学サマースクール.....	5
3.1 実施体制.....	5
3.2 募集要項とポスター.....	6
3.3 研修日程.....	9
3.4 参加学生一覧.....	10
3.5 タイ語会話教室.....	11
3.6 共同発表.....	12
3.7 担当教員所感.....	13
3.8 参加学生報告.....	15
4 ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール.....	21
4.1 実施体制.....	21
4.2 募集要項とポスター.....	22
4.3 研修日程.....	25
4.4 参加学生一覧.....	26
4.5 ベトナム語会話教室.....	27
4.6 共同発表.....	29
4.7 担当教員所感.....	30
4.8 参加学生報告.....	34

5	インドネシア大学スプリングスクール	41
5.1	実施体制	41
5.2	募集要項とポスター	42
5.3	研修日程	45
5.4	参加学生一覧	46
5.5	インドネシア語会話教室	47
5.6	共同発表	48
5.7	担当教員所感	49
5.8	参加学生報告	51

はじめに

学術研究や教育の国際化のなかで、欧米諸国の大学のみならず東南アジア諸国連合の国々との関係も深まりつつあります。なかでも、大学間交流事業としての留学生交流は近年ますます盛んになりつつあります。

京都大学でも、「京都大学ジャパングートウェイ構想」に基づき、世界トップレベル大学への学生派遣が展開されています。東南アジア諸国への学生派遣も広がりつつあります。私たち京都大学アジア研究教育ユニットが提供する派遣プログラムも、その一端を担うものとしてこれまで進められてきました。



平成28年度は、昨年度に引き続いて、チューラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校（人文社会科学大学と外国語大学）、インドネシア大学の3大学を対象に、それぞれ派遣プログラムが実施され、合計16名の京都大学学部生・大学院生が派遣されました。

本報告書はこれら3つのプログラムの実施内容や実施体制についてまとめたものです。事業の実態を広く共有していただくとともに、今後の学生派遣事業の実施にとって参考になればと思っています。

それぞれの派遣プログラムには、学部・研究科を問わず様々な背景知識を持った学部生・大学院生が参加しました。具体的には、タイに5名、ベトナムに6名、インドネシアに5名が派遣されています。これら3つの派遣プログラムは、派遣先の大学でその国の人と交流し、文化に触れることによって、自分自身及び日本への再理解・再構築につなげることを目的としたものです。派遣先大学では、語学力・コミュニケーション能力を育み、多様な文化・社会に対する理解を促し、世界の中の日本および東南アジアに対する国際的な見方を身につけるための様々なコース内容が提供されています。同時に、コース内容には派遣先大学の学生達との共同学習・共同研究の機会がもうけられています。こうした機会を通じて、日本語・日本文化の紹介等を含めて、上記の目的を派遣学生達に達成させることに、本派遣プログラムの意義があると考えています。

平成28年度もこれらの派遣プログラムを実施できたのは、京都大学アジア研究教育ユニットと国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）がこれまで蓄積してきた様々な学生派遣の実績によるものです。派遣先大学のプログラム担当教職員との連携強化を含め、様々な危機管理体制を整備してきたおかげで、今回も大きな問題なく全てのプログラムを終了することができました。

その背景には、多くの方々のさまざまなご協力がありました。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターの諸先生方、アジア研究教育ユニットの先生方、教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛とアジア研究教育ユニットの事務担当者、派遣先大学における教職員の方々およびサポート役を務めていただいた学生たち。こうした方達のご支援ご

協力なしには、今回の3つのプログラムは成り立たなかったのではないかと考えています。
ここに心より感謝したいと思います。

2017（平成29）年3月

京都大学アジア研究教育ユニット
ユニット長 伊藤 公雄

1 SEND プログラム

1.1 概要

“SEND” は、*Student Exchange - Nippon Discovery* の頭文字をつなげたものである。これは、京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）が提供するプログラムの一つであり、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジア（および世界各国）と日本のあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指すことを主眼としている。

KUASU は、文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれたASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成；平成24年度開始）の推進組織である。その構成部局は、京都大学の文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）、東南アジア地域研究研究所（旧東南アジア研究所）、人文科学研究所、経営管理研究部である。

本報告書は、KUASU と国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターを主体として実施された、平成28年度の SEND プログラム派遣事業について報告するものである。表1の3件の短期派遣プログラムが実施された。

表1 本報告書で扱う短期派遣プログラム一覧

形態	プログラム名称（実施期間）	対象国
派遣	「タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール」 （平成28年8月28日～9月10日）	タイ
派遣	「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール」 （平成28年9月11日～25日）	ベトナム
派遣	「インドネシア大学スプリングスクール」 （平成29年2月19日～3月5日）	インドネシア

1.2 SEND 準備

1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

SEND プログラムに参加する京都大学の学生は、プログラム内で日本語・日本文化についての説明や考察をおこなうことになっている。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学でそれを実践する。受入プログラムでは、短期交流学生（＝短期留学生）が主体となって京都大学で説明・考察をおこなう。これらは、派遣／受入のどちらにおいても、日本人学生と外国人学生との共学を基盤として実践される。その実践能力を養成するため、平成25年度から、京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターの教員が中心となってリレー式に担当する「日本語・日本文化演習」（全学共通科目：キャリア群）が毎年度開講されている。その概要は、以下の表2にしめすシラバスの通りである。

表2 平成28年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者所属 職名・氏名	国際高等教育院 教授 河合 淳子 教授 長山 浩章 准教授 家本 太郎 環境安全保健機構 准教授 阪上 優 学際融合教育研究推進センター 特定助教 稲垣 和也	
群	キャリア群	分野分類	その他キャリア形成	使用言語	日本語／英語
単位数	1単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度	2016 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	火5／火2	教室	1 共22／吉田国際交流会館 南講義室1		
授業の概要・目的					
日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験とその準備を通して、日本文化を再発見し、その過程を通してグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。					
到達目標					
<ul style="list-style-type: none"> ・日本語、日本文化を捉える多様な視点を理解すること。 ・本講義で学んだことを生かして、まずは授業内で、日本語や日本文化を実際に紹介する経験をする。 					
授業計画と内容					
多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。					
1回目 オリエンテーション <講義担当：河合、長山、家本、阪上、稲垣>					
2～7回目 <前期担当：稲垣> <後期担当：長山>					
<ul style="list-style-type: none"> ・非母語話者に対する日本語教授法解説 ・日本語教授法実習 ・講義内で随時発表の機会を設ける ・日本文化・社会の何をどう伝えるかー（講義） ・日本文化・日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習） ・中間プレゼンテーション 					
8回目 日本文化とメンタルヘルス<講義担当：阪上>					
9～14回目 <前期担当：河合> <後期担当：家本>					
<ul style="list-style-type: none"> ・多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー（講義） ・日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習） ・プレゼンテーション ・非母語話者に対する日本語教授法解説 ・日本語、日本語教授に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習） ・期末プレゼンテーション 					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。なお、本授業は現在実施されている海外派遣推進プログラム（SEND: Student Exchange Nippon Discovery)の推奨科目となっている。					
成績評価の方法・観点及び達成度					
積極的参加態度、課題提出、発表、プレゼンテーションを総合して評価する。 配点の割合は講義において示す。					
教科書／参考書等					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
授業外学習（予習・復習）等					
実習、発表、プレゼンテーションの準備として、段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					

1.2.2 情報共有

SEND プログラムを実施するため、以下の図 1 にしめすような情報共有体制を活用した（図中の矢印は情報の行き来をあらわす：太線は教職員が関わる場合、細線は学生からの情報の流れをあらわす）。この連絡体制は、プログラム実施期間中および期間後も活用した。

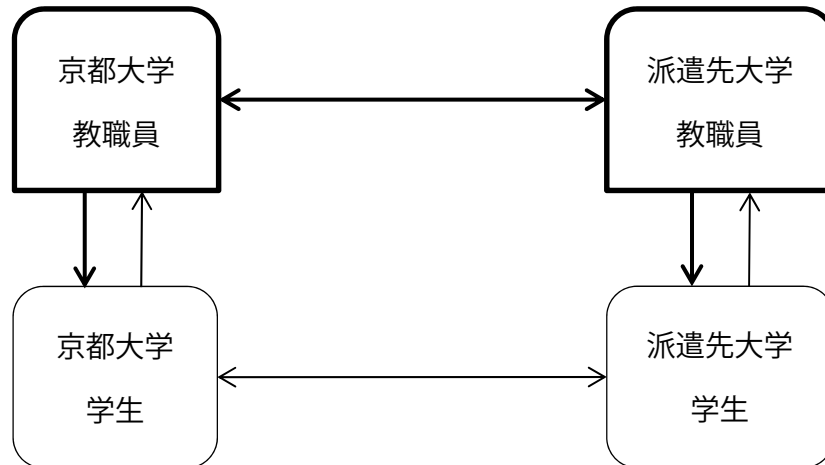


図 1 情報共有体制の概要

共有した情報の内容としては、以下のものがあげられる。

- 教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務的な情報
- 教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的な情報
- 学生－学生間： 共同学習に関する情報、プログラム内容に関する事務的な情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

- 電話： 教職員・学生を問わず、幅広く使用
- Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用
- クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用
- LINE： おもに学生－学生間で使用（一部、教職員－学生間でも使用）
- 他のSNS： おもに学生－学生間で使用

また、緊急連絡網を作成し、教職員間での危機管理体制の整備に努めた。緊急連絡網には、i) プログラムの日程表、ii) 利用フライト情報、iii) 参加者の氏名、連絡先、現地使用携帯電話番号のリスト、iv) 各大学の緊急時連絡窓口、v) 参加者の宿泊施設情報、vi) 学研災付帯海外留学保険の提携病院リスト、vii) 大使館情報等を載せた。

2 実施状況

本節では、平成28年度派遣プログラムへの学生の参加状況と、その費用補助状況の概要について述べる。おもに費用の面から、短期派遣の京都大学学生の修学を支援する体制には、以下の二種類がある。

- ① 大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～《「開かれたASEAN+6」による日本再発見－SEND を核とした国際連携人材育成》（文部科学省）
- ② JASSO 奨学金（HTK1614301015：多文化共学[派遣]留学プログラム）
（日本学生支援機構）

以下の表3では、基本情報（実施期間・応募・参加学生数）、費目別の費用補助該当者数（学費・渡航費・宿泊費・チューター費）、奨学金受給者数（JASSO 奨学金）、各項目の合計人数を、上記①～②による費用負担の該当是非と合わせて示す。

表3 2016年度派遣プログラムの実施状況概要

	タイ・チューラーロンコーン 大学サマースクール	ベトナム国家大学 ハノイ校サマースクール	インドネシア大学 スプリングスクール	計
実施期間	平成28年 8月28日～9月10日	平成28年 9月11日～25日	平成29年 2月19日～3月5日	
応募学生数	5名	6名	5名	16名
参加学生数	5名	6名	5名	16名
学費補助	0名	0名	① 5名	5名
渡航費補助	① 5名（全額）	① 6名（全額）	① 5名（一部）	16名
宿泊費補助	0名	0名	0名	0名
チューター費	① 5名	① 6名	① 5名	16名
JASSO 奨学金	② 2名	② 5名	② 2名	9名

3 チュラーロンコーン大学サマースクール

3.1 実施体制

チュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University [CU])

実施責任者

Chomnard Setisarn 文学部東洋言語学科日本語講座・助教授

Yuphawan Sopitvutiwong 文学部東洋言語学科日本語講座長・講師

担当教職員

Panlanan Thananchai 文学部東洋言語学科日本語講座・助手

京都大学

実施責任者

伊藤 公雄 大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

平田 昌司 大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット・教授

担当教職員

河合 淳子 国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・教授

稲垣 和也 アジア研究教育ユニット・特定助教

3.2 募集要項とポスター

SENDプログラム

2016年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールのご案内

Summer Intensive Course for Thai Language and Culture 2016

申込締切：2016年5月23日(月)正午

【日程】

2016年8月28日(日) タイ・バンコク都到着
8月29日(月)～9月9日(金)：講義および研修(於チュラーロンコーン大学)
9月10日(土) 帰国

【プログラム概要】

本プログラムは、タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供する。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【募集詳細】

募集人数： 5名程度
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)
応募条件： 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者

【費用詳細】

学費： 65,000～85,000円(参加人数により変動)
航空券： 80,000～90,000円(参加人数により変動)
海外旅行保険： 約12,000円(AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」)
宿泊費： 46,000～58,000円(参加人数により変動、2名1室利用が基本)
国内移動費等： 約50,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生する

【補助・支援詳細】

費用補助： 5名程度(上限100,000円)
JASSO奨学金： 若干名(1名につき70,000円)
※ JASSO支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限る

【申込】

1. オンライン申請をおこなう(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 以下の書類(a-gは全員必須)をそろえ、下記の申請書類提出先に提出する
 - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
 - b. 応募申請書(書式1-1)
 - c. 語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - d. 成績証明書
 - e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4一枚程度)
 - f. 海外留学誓約書
 - g. パスポート(入国時に有効期限6ヶ月以上のもの)の顔写真ページのコピー(未取得者はその旨申し出、早急に取得)

- h. 収入に関する証明書（JASSO 申請者のみ。学部生は（両親の）世帯の収入、大学院生は、本人および配偶者の収入。申請条件、提出書類については応募申請書（書式 1-1 の 3 頁）を参照のこと）
- i. （任意）：語学試験（英語）のスコアのコピー

下記ホームページから、募集要項確認、オンライン申請、各種書類ダウンロードをおこなう。

<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>

申請書類提出先：吉田本部構内 旧石油化学教室本館 1 階 京都大学 教育推進・学生支援部
国際教育交流課 交流支援掛 075-753-5407

選考：書類審査および面接によりおこなう。

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 稲垣 和也 [asean-send.6 * mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)
（「*」を @ に変更）

【募集・選考スケジュール】

申込締切： 2016 年 5 月 23 日（月）12:00（正午）
面接： 2016 年 5 月 27 日（金）12:20-12:50
6 月 1 日（水）12:20-12:50
上記日程のうち、1 人 10 分程度
（於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6）
最終結果通知： 2016 年 6 月 6 日（月）
オリエンテーション： 2016 年 6 月 10 日（金）12:10-12:50
於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6（出席義務あり）
海外渡航のためのヘルスケア・安全教育に関する講義
2016 年 7 月予定（出席義務あり）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2016 年度前期：火曜 5 限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・参加者全員に、治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づける。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（アジア研究）の単位に充当されることがある。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれている。

募集説明会

日時：2016 年 5 月 16 日（月）12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6 (I-S6)

SEND プログラム (2016 年度)



タイ・チュラーロンコーン大学 サマースクール

Summer Intensive Course for Thai Language and Culture 2016

プログラム日程：2016年8月28日（日）～ 9月10日（土）

説明会：2016年5月16日（月）12:10～12:50 @吉田南構内 吉田国際交流会館講義室 6

【プログラム概要】

タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、現地研修等の機会を提供する。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【詳細】

- ・募集人数： 5名程度
- ・研修内容： タイ言語文化講義、学生交流、現地研修、発表討論
- ・募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・費用：

学費；	65,000～85,000円（参加人数により変動）
航空券；	80,000～90,000円（参加人数により変動）
海外旅行保険；	約12,000円（AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」）
宿泊費；	46,000～58,000円（参加人数により変動、2名1室が基本）
国内移動費等；	約50,000円

※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。

- ・補助支援： 以下のとおり各種支援を行います。

費用補助； 上限100,000円（5名程度）
JASSO奨学金； 70,000円（若干名）

※ JASSOの支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限ります。

【申込方法】

- ・申込み： 下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>
- ・提出先： 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 京都大学 教育推進・学生支援部
国際教育交流課 交流支援掛 075-753-5407

【締切日】 2016年5月23日（月）12時00分（正午）

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 稲垣 和也 [asean-send.6 * mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

（「*」を@に変更）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2016年度前期：火曜5限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入を義務づけます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（アジア研究）の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれています。



3.3 研修日程

チュラーロンコーン大学サマースクール โครงการอบรมหลักสูตร Chulalongkorn Univ. Summer School 2016			
月日 (曜)	時間	プログラム概要 (場所/教室)	担当者
วันที่ เดือน (วัน)	เวลา	กำหนดการ (สถานที่ ห้องเรียน)	ผู้รับผิดชอบ
8月28日 (日)	15.35	เดินทางถึงประเทศไทย 到着 TG623 (スワンナプーム国際空港)	パンラナン
	18.00	宿泊料支払い・チェックイン (CU iHouse) ชำระเงินค่าที่พัก/ เช็คอิน	
8月29日 (月)	8:15	出迎え	パンラナン
	09.00 - 12.00	タイの基礎知識 (401/4 MCS) ความรู้พื้นฐานเกี่ยวกับประเทศไทย	チョムナード先生 อาจารย์ชมนาด
	13.00 - 16.00	チュラーロンコーン大学キャンパス案内 (401/4 MCS) แนะนำจุฬาฯ	ワンนาシン先生 อาจารย์วรรณศิลป์
8月30日 (火)	09.00 - 12.00	タイ語講座 (1) (401/4 MCS) เรียนภาษาไทย	カモンティップ先生 อาจารย์คมลทิพย์
	13.00 - 16.00	Japanese Reading for Business (501/17MCS, 授業参加) การอ่านภาษาญี่ปุ่นเชิงธุรกิจ	チョムナード先生 อาจารย์ชมนาด
8月31日 (水)	09.00 - 12.00	タイ語講座 (2) (401/4 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生 อาจารย์เสาวลักษณ์
	13.00 - 16.00	Thai History (303 MCS, 授業参加) ประวัติศาสตร์ไทย Sec. 1	Assoc.Prof. Dhiravat na Pombejra, Ph.D.
9月1日 (木)	09.00 - 12.00	タイ語講座 (3) (401/4 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生
	13.00 - 16.00	エメラルド寺院見学 ฆวัดพระแก้ว	ワンนาシン先生
	夕方	ムエタイショー (アジアティーク) ชมมวยไทยโชว์ เอเชียทีค	
9月2日 (金)	09.30 - 12.30	タイの歴史と文化 (401/12 MCS) สังคมและวัฒนธรรมไทย	チャーณวิฑิต先生 อาจารย์ชานวิชิต
	13.00 - 16.00	タイ語講座(4) (401/12 MCS) เรียนภาษาไทย	ワンนาシン先生
9月3日 (土)	8.00 - 終日 ตลอดวัน	ゴクレット (チャオ普拉ヤ川の中州での庶民生活の实地研修) ไปเกาะเกร็ด	チョムナード先生
9月4日 (日)	終日 ตลอดวัน	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
9月5日 (月)	09.30 - 12.30	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
	13.00 - 16.00	タイ語講座(5) (401/4 MCS) เรียนภาษาไทย	カモンティップ先生
9月6日 (火)	09.00 - 12.00	タイ料理作り (Floor 9 MCS) ทำอาหารไทย	ワンนาシン先生
	13.00 - 16.00	タイ語講座(6) (401/14 MCS) เรียนภาษาไทย	カモンティップ先生
9月7日 (水)	09.00 - 12.00	Thai Literature and Culture (301-302 MCS, 授業参加) วรรณคดีไทย	Namphueng Padamalangula, Ph.D.
	13.00 - 16.00	タイ語講座(7) (401/12 MCS) เรียนภาษาไทย	ワンนาシン先生
9月8日 (木)	09.30 - 12.30	日本文化入門で研究発表 (BRK314) ปริทัศน์วัฒนธรรมญี่ปุ่น	増野先生 อาจารย์มธุโชติ
9月9日 (金)	09.00 - 11.00	修了式 (815 MCS) พิธีมอบประกาศนียบัตร	
9月10日 (土)	11.00	เดินทางกลับ 帰国 TG 672 (スワンナプーム国際空港)	

BRK อาคารบรมราชกุมารี : โบโรมาラー-ชัคมารี่-บิล, MCS อาคารมหาจักรีสิรินธร : มหา-ชัคมารี่-สิรินธร-บิล

3.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	Name	所 属	学年
	康村 博宣	YASUMURA HIRONOBU	大学院法学研究科	M1
	木野 結	KINO YUI	文学部	B4
◎	清水 来奈	SHIMIZU RANA	文学部	B2
○	山淵 あいり	YAMABUCHI AIRI	文学部	B2
	木邑 彩乃	KIMURA AYANO	文学部	B2

3.5 タイ語会話教室

Thai Language Teaching Report

Ms. Wannida SAE-TANG

Master student, Graduate School of Agriculture, Kyoto University

I had an opportunity to provide introduction of Thai language class for Japanese students who were going to attend SEND program at Chulalongkorn University, Thailand. This class aims to teach the basic Thai language and enable the students to apply it to their daily life. I showed some of grammar lessons and later focused on necessary conversations. During the lessons, not only language that I mentioned but also Thai culture, historical story and top tips to do in Thailand were provided.

On August 22nd, 2016

First of all, we discussed about the difference between Japanese and Thai language, then I showed them whole Thai consonants and vowels. We practiced to pronounce and write all together. I suggested the easy way to introduce themselves in Thai and showed how Thai people actually do when they greet each other.

On August 23rd, 2016

I started with Thai consonant- and vowel-review, then we built easy words and learned about reading with 5 tone sounds in Thai. I presented some of interesting words, for example, มหาวิทยาลัย (University), ไทย (Thailand), ญี่ปุ่น (Japan) and สวัสดี (Hello). Then, I let them to write their own name in Thai and helped to correct them at the same time. Lastly, I showed them how to count numbers in Thai.

On August 24th, 2016

From the group of words that they had already learned previously, I thought they could use it and make uncomplicated sentences. At the same time, I also gave new basic words of nouns, verbs and adjectives. Later, we talked about Thai foods and conversations in Thai restaurant. Thus, they practiced to order some meals and request a favor like no-spicy food in Thai.

On August 25th, 2016

In this class, we continuously learned about Thai sentence structure. Moreover, about negative and interrogative sentences were analyzed carefully. I introduced about Thai money both of coin and banknote. Then, I gave useful conversations that may happen in Thai souvenir shop. They participated in a play role as tourists and I played the role of the shopkeeper.

On August 26th, 2016

Regarding to transportation in Thailand, which is rather difficult than Japan, I did comparison and introduced them the way to use public transportation in Bangkok. At the end, I examined all of students by paper-based test. I asked them to create the possible conversations in various situations such as shopping, food ordering and getting lost. From my point of view, all of students could give interesting answers that were correct and utilizable.

3.6 共同発表

日時： 2016年9月8日(木) 9:30~12:30
場所： チュラーロンコーン大学、ボロマラーチャクマリー・ビル 314 教室
担当教員： 増野 高司(チュラーロンコーン大学文学部・講師)

1. 「日本とタイにおける道徳観の違い」
康村 博宣 京都大学大学院法学研究科修士課程1年
Sawita Pimpapan チュラーロンコーン大学文学部
Pisut Chuenjai チュラーロンコーン大学文学部
Amita Jenwikai Lipscomb チュラーロンコーン大学文学部
Dhanida Areegarnlert チュラーロンコーン大学文学部
Kullacha Pattarapanee チュラーロンコーン大学文学部
Pimchanok Anambutr チュラーロンコーン大学文学部
Wan-Anong Tesriprasert チュラーロンコーン大学文学部
2. 「日本の『オネエ』とタイの『ガトウーイ』の比較」
木野 結 京都大学文学部4年
Parit Sungsi チュラーロンコーン大学文学部
Kantika Jittanongsak チュラーロンコーン大学文学部
Thanyarush Jenviphich チュラーロンコーン大学文学部
Fasai Soonsun チュラーロンコーン大学文学部
Yapa Viriyapoka チュラーロンコーン大学文学部
3. 「タイと日本のTV番組」
清水 来奈 京都大学文学部2年
Manee Thosuwonjinda チュラーロンコーン大学文学部
Pruek Apaipim チュラーロンコーン大学文学部
Napassorn Tangtermsarp チュラーロンコーン大学文学部
Monlanee Srirakul チュラーロンコーン大学文学部
Aticha Ruangsirikulchai チュラーロンコーン大学文学部
Panumat Ruchinanon チュラーロンコーン大学文学部
Panukarn Kongborwornkiat チュラーロンコーン大学文学部
4. 「タイと日本の若者の文化」
山淵 あいり 京都大学文学部2年
Chitipat Pumdontree チュラーロンコーン大学文学部
Wuttanit Srisiwaset チュラーロンコーン大学文学部
Mathas Kangwankaipaisan チュラーロンコーン大学文学部
Parkin Chatrunghewan チュラーロンコーン大学文学部
Chanatcha Suriyasenee チュラーロンコーン大学文学部
Nitsiree Mahathanaphanij チュラーロンコーン大学文学部
Arthitada Hanada チュラーロンコーン大学文学部
5. 「タイと日本の学制服比較」
木邑 彩乃 京都大学文学部2年
Piyamon Kirdmongkol チュラーロンコーン大学文学部
Nattarika Surakamheng チュラーロンコーン大学文学部
Kavisara Leungoboun チュラーロンコーン大学文学部
Kamolmart Petchrak チュラーロンコーン大学文学部
Supichaya Waradee チュラーロンコーン大学文学部
Phattanan Korkaew チュラーロンコーン大学文学部
Supissara Junpuek チュラーロンコーン大学文学部

3.7 担当教員所感

SEND「サマースクール」—短期間だからこそできること—

チョムナード・シティサン

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座・助教授

本年度の京都大学のための短期学習プログラム「サマースクール」は2016年9月9日を以て2週間の日程を終えました。8月から9月にかけてのタイは雨季で、例年なら毎日のように雨が降る時期ですが、今年はやや雨が少なく、暑い日が続きました。それでもサマースクールに参加した京大生の皆さんは、全日程を元気にこなし、チュラーロンコーン大学の日本語専攻の学生との共同研究においても素晴らしくまとまった成果を披露してくれました。



このプログラムを担当するようになってからは、何人かの参加者と Facebook を通じてもつながりを作ることができました。SNS の中でもタイでは Facebook が圧倒的な普及率を誇っており、私も授業の伝言板や連絡手段として多用しています。ふだんよく知っているつもり相手でも、Facebook 上では違った一面を見せたりするので、その意外性が面白いのです。中でも Facebook に掲載された写真を見るのは、その持ち主の独特な視点や感性を垣間見ることができるという意味で大好きです。タイ滞在中、京大生の皆さんとはよく話をしましたが、彼らが撮った写真は、会話以上にタイで感じとったことを率直に語ってくれたような気がします。また、タイ人の私が全然気づかなかったものや行動、日常の風景などを魅力いっぱいに伝えているようにも映り、いつもその感性に感心させられます。

教鞭を執る傍ら、私は翻訳もしていますが、一冊の訳書が完成するまでに何度も原書に目を通すことがあります。しかしながら、尊敬する編集者からいわれたことは意外にも、「1回目に読んだ印象を大切にしてください」ということです。精読して細かいニュアンスをしっかりと理解することも大事ですが、その過程で一般の読者が味わう最初の印象を決して忘れてはいけないという助言だと解釈しています。このことはサマースクール参加者と共通しているようにも思います。「サマースクール」は2週間という短い期間ですが、新鮮な目と感覚で「他者」と接し、違いを認識して印象付けるにはちょうどいい長さで、小説をわくわくしながら初めて読むのと同じ感覚だと思います。一方、すべてが日常化して、毎日が冒険というわくわくした気持ちが薄れてしまう長期滞在は、理解は深まるけれども、話が全部わかってしまったがために、読み進む楽しみが薄れてしまった精読に比すことができるかもしれません。今後も参加者の皆さんにはぜひわくわくしながら、短期間だからこそ発見できるタイを満喫して一生の思い出にしてもらいたいと思います。

โครงการ SEND “ซัมเมอร์สกูล” : สิ่งที่ทำได้เฉพาะในช่วงเวลาสั้น ๆ

ผู้ช่วยศาสตราจารย์ดร.ชมนาด ศีตีสาร
สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย

โครงการเรียนรู้ระยะสั้นหรือ “ซัมเมอร์สกูล” สำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตในปีนี้ได้จบช่วงเวลา 2 สัปดาห์ลงเมื่อวันที่ 9 กันยายน 2559 โดยทั่วไปปลายเดือนสิงหาคมถึงต้นเดือนกันยายนจะเป็นช่วงหน้าฝน มีฝนตกแทบทุกวัน แต่ปีนี้มีฝนตกค่อนข้างน้อยและอากาศร้อนทุกวัน ถึงกระนั้นนักศึกษามาจากมหาวิทยาลัยเกียวโตที่เข้าเรียนในซัมเมอร์สกูลก็มาเรียนทุกวันจนจบโครงการอย่างราบรื่น และได้นำเสนอผลงานวิจัยที่ติemaker่วมกับนิสิตเอกภาษาญี่ปุ่นของจุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย นับตั้งแต่ทำหน้าที่รับผิดชอบโครงการมา ดิฉันได้เป็นเพื่อนทางเฟซบุ๊กกับนักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตหลายคน ในประเทศไทย เฟซบุ๊กเป็นโซเชียลมีเดียที่มีอัตราการใช้งานสูงกว่าโซเชียลมีเดียอื่น ๆ อย่างเทียบไม่ติด ดิฉันเองก็ใช้เฟซบุ๊กมากในฐานะเป็นกระดานข้อความสำหรับวิชาที่สอน และเป็นเครื่องมือในการสื่อสาร เพื่อนบางคนแม้เราจะคิดว่ารู้จักเขาดี แต่เมื่ออยู่บนเฟซบุ๊กบางครั้งก็อาจแสดงด้านที่แตกต่างไปออกมาให้เห็น ทำให้ดิฉันรู้สึกสนุกกับความผิดคานั้น ดิฉันยังชอบดูรูปบนเฟซบุ๊กมากเป็นพิเศษ เนื่องจากแสดงให้เห็นถึงมุมมองเฉพาะตัวและเซนส์ที่ไม่เหมือนใครของเจ้าของรูปได้ ในช่วงพำนักในเมืองไทย แม้ดิฉันจะมีโอกาสพูดคุยกับนักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตบ่อยครั้ง แต่กลับรู้สึกว่าภาพที่พวกเขาถ่ายนั้น ได้เล่าเรื่องที่เราไม่รู้เกี่ยวกับเมืองไทยได้อย่างตรงไปตรงมายิ่งกว่าการสนทนาเสียอีก อีกทั้งภาพเหล่านั้นยังแสดงให้เห็นถึงสิ่งของหรือการกระทำ ตลอดจนทัศนียภาพในชีวิตประจำวันของคนไทยอย่างดิฉันไม่เคยสังเกตมาก่อน ได้อย่างมีเสน่ห์ล้นเหลือ ทำให้ดิฉันรู้สึกถึงทุกครั้งที่ได้ชม

นอกจากสอนหนังสือแล้ว ดิฉันยังทำงานแปลด้วย กว่าจะแปลงานเสร็จแต่ละเล่ม ดิฉันต้องอ่านต้นฉบับซ้ำหลายต่อหลายครั้ง แต่บรรณาธิการที่ดิฉันนับถือกลับบอกดิฉันว่า “ให้เก็บความรู้สึกของการอ่านต้นฉบับครั้งแรกไว้ให้ดี” ดิฉันตีความเอาเองว่าสิ่งที่บรรณาธิการท่านนั้นแนะนำมีความหมายว่า การอ่านอย่างพิถีพิถันเพื่อทำความเข้าใจรายละเอียดเล็กน้อยให้ได้ครบถ้วนก็สำคัญ แต่ในกระบวนการอ่านอย่างลึกซึ้งนั้น ก็ต้องไม่ลืมความรู้สึกครั้งแรกที่อ่านหนังสือซึ่งเป็นสิ่งที่ผู้อ่านทั่วไปจะได้รับด้วย ดิฉันคิดว่าเรื่องนี้สามารถพูดได้กับผู้เข้าร่วมโครงการซัมเมอร์สกูล กล่าวคือ ถึงแม้ว่าซัมเมอร์สกูลจะเป็นช่วงเวลาสั้น ๆ เพียง 2 สัปดาห์ แต่ก็ยาวกำลังดีสำหรับการทำความรู้จักกับ “คนอื่น” ด้วยสายตาและความรู้สึกที่ยังสดใหม่ พร้อมกับตระหนักและจดจำความแตกต่างจากตัวเองนั้นไว้ ตรงข้ามกับการพำนักในต่างประเทศเป็นเวลานาน ที่จะทำให้ทุกสิ่งรอบตัวกลายเป็นชีวิตประจำวันอันจำเจ และความรู้สึกตื่นเต้นเริ่มแรกรับกับทุกวันนี้คือการผจญภัยก็จะหายไป ซึ่งอาจเปรียบได้กับการอ่านอย่างละเอียดที่แม้จะทำให้มีความเข้าใจที่ลึกซึ้งขึ้น แต่ก็ขาดความตื่นเต้นที่จะอ่านต่อไปเนื่องจากรู้เรื่องหมดแล้ว ดังนั้นดิฉันจึงอยากให้ผู้เข้าร่วมโครงการนี้ทุกคนตื่นเต้นสนุกสนานกับการค้นพบประเทศไทยที่สามารถทำได้เฉพาะในช่วงเวลาสั้น ๆ นี้ยิ่งกว่าเดิม เพื่อทำให้เป็นความทรงจำอันดีไปตลอดชีวิต

3.8 参加学生報告

2016年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールプログラム

清水 来奈（文学部2年）

今回の派遣プログラムを通し、タイにおける仏教からの影響と日本文化からの影響を強く感じました。タイ文化は、そのあらゆる面において仏教が色濃く影響していることが大きな特徴と言えるでしょう。あまり海外へ行った経験がなく無宗教の自分は、普段の生活の中で宗教の影響を感じる事がなかったのですが、今回タイに行ったことでそうした宗教がひとびとの生活や人生にまで大きな力を及ぼしていることを実感することができました。今後こうしたプログラムの参加や留学を視野に入れているのですが、国際理解において「宗教」は切っても切り離すことのできない問題であり、少なくとも自分が訪れる国の宗教についてはしっかり学習しなければならないと思いました。今後、宗教を取り扱う講義を履修しようと考えています。また、日本文化がタイ文化に与えている影響について、主にアニメやキャラクターに関する影響が際立っています。タイの若者の多くは日本のキャラクターのものを身につける傾向が強く、大型のショッピングモールに行くと日本のアニメキャラクターのグッズを扱う店をよく目にします。また、自分の最終プレゼンテーションの準備を通して発見したことの一つに、タイのTVで放送されるアニメ番組の多くが日本のものであるという事実がありました。こうした状況を目にして、改めてアニメ大国としての日本が海外に与えている影響を感じたと同時に、日本のアニメが発展していった経緯や歴史について深く調べたいと思いました。

タイでの経験で強く心に残っているのは、交通整備の問題です。タイでは交通に関する規制は比較的緩く、日本に比べ運転のスピードが速いという特徴があります。横断歩道はほとんどなく、タイミングを見計らって道路を渡らねばなりません。またトゥクトゥクやモーターサイなどの公共交通機関も安全面に問題があります。どれも日本では考えられないような経験であり、日本における安全な交通事情を実感しました。二つ目に、ネット環境について述べたいと思います。大学と寮外では無線LANが使用できなかったため、タイでは全体を通してネットを使うじかんが少なかったです。しかしそれでも不便だと感じることはほとんど無く、普段自分がどれだけ必要以上にネットを使用していたかを知ることができました。

このプログラムはタイ語の授業に加え、タイの歴史や文化に関する講義、チュラーロンコーン大学での英語授業への参加がありました。タイ語の授業は情報量が多く大変だと感じることもありましたが、授業内容が面白く、タイでの生活に実際に役に立てることができたのでよかったです。タイの歴史・文化の授業では古代から現代に関する内容まで幅広く学ぶことができ、とても興味深かったです。大学の授業参加は、自分の英語能力では少し理解できない部分もありましたが、滅多にできない経験ができて大変よかったですと思います。

先にも述べましたが、このプログラムを通して日本のアニメーション・映像技術の高さを再認識しました。もともと映像は自分の興味のある分野のひとつだったので、これからもっと詳しく研究していきたいと思います。また、東南アジアの文化に触れたことで自分のアジアに対する興味、他のアジアの国々の文化にも触れてみたいと感じたと同時に、やはり自分は西洋の文化・特に英語圏の文化が好きなのだ改めて感じ、将来は英語圏の文化の中に身を置いて暮らしたいと改めて感じました。

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール

山淵 あいり（文学部2年）

このプログラムで特に重点が置かれていたタイ語講座では、タイで生活するうえで役立つ言葉を多く学ぶことができました。食堂や市場で習いたてのタイ語を実際に使うことができたことは、現地での言語学習ならではの経験であり、毎日のタイ語学習のモチベーションにもつながっていたと思います。現地学生との共同発表では、うまく意思の疎通ができず戸惑うこともありましたが、タイの社会や文化、国民性などを学ぶことができたとともに、チュラーロンコーン大学の学生の日本語能力と情報処理能力の高さに非常に刺激を受けました。悩みながらも一つのプレゼンテーションを完成させられたことは、異なる文化を背景に持つ人々とコミュニケーションをとる能力の向上につながったと思います。実地研修ではタイの寺院や市場、ニューハーフショーなどを見学し、歴史、生活、宗教、文化、観光など多方面からタイ王国について学ぶことができました。

開発が進むバンコクの街には新と旧が共存していました。想像以上に都会的で華やかな高層ビルと、その脇で生きるために必死に働く人々の活気に満ちた風景は、日本ではあまり見られない景色であり非常に新鮮で印象的でした。夜遅くまで人や車でにぎわう街の様子はバンコクの良さであると同時に、多くの課題が山積しているとも感じました。交通、衛生、時間管理など隅々まで整った管理がなされている日本の良さを再確認する良いきっかけにもなったと思います。

2週間海外に滞在し、現地の大学に通ったのは初めての経験でした。現地学生に様々な場所に連れて行ってもらうことで観光ではできない経験を多くすることができたように思います。現地学生と交流する時間が多かったことで、タイ人の寛大で親切な国民性にも触れることができたのは、この SEND プログラムに参加したからこそできた経験だと思います。現地の先生から、タイ社会には、自分本位の世界、気配りの世界、家族の世界の三つの世界があると聞きました。現地の友人の気配りやおもてなしから、友人や家族を大切にするタイ人の温かい国民性を身をもって感じることができました。ただ、時間にルーズであったり、困った状況に陥ってもニコッとわらって「マイペンライ」「サバイサバイ」(Never mind. , That's alright.) といっただけでやり過ごしたりする、言いようによっては自分本位とも言える国民性も、楽観的でおおらかな感じがして私は大好きです。

2週間という短い間ではありましたが、伝統あるチュラーロンコーン大学で学び、現地の人々と交流し、タイの様々な地を見学できたことは、私の東南アジアへの関心と問題意識の向上につながりました。タイ語学習のきっかけを得ることができたのも私にとって非常によい出会いだったと思います。異文化をよりよく知るには、実際に現地に赴くことと、現地言語の知識を持つことが必要不可欠であることを実感しました。そして、チュラーロンコーン大学の学生の学習意欲や日本語能力の高さ、海外留学に対する積極性は、私の学習意欲を高める刺激となりました。このプログラムで得た経験と出会い、そして再認識したタイ社会の課題を、今後のタイ語学習や東南アジア研究、その他の学習に必ず生かしていきたいと思っています。

今回このプログラムを通して関わってくださった京都大学、チュラーロンコーン大学の教職員の皆様、現地学生の皆様には、貴重な経験をさせていただき、深く感謝しています。ありがとうございました。

チュラーロンコーン大学サマースクール

木邑 彩乃（文学部2年）

このプログラムの主な内容は、タイ語学習の授業と、タイ人学生との共同発表である。タイ語学習は毎日3時間あり、会話が中心だった。派遣準備として日本でタイ語講座を受けていたため導入は比較的容易だったが、導入部を過ぎるとすぐに、授業に付いていくのがやっとなというレベルになった。タイ語は想像通り難しかったが、現地の生活に密着した事柄を学んだため、タイでの生活にすぐさま応用できるものばかりだった。タイ語を学んだことは、共同発表をする学生と距離を縮めるのにも役立ったと思う。プログラム期間は2週間しかなく、タイ文字を学習する段階までは至らなかった。この短期間での言語学習を土台にし、今後長期にわたり継続的にタイ語を学びたいと思う。タイ人学生との共同発表では、自らが発表準備をリードするのに苦戦したり、発表の方向性が見えなくなったりすることもあったが、タイ人学生との交流という点では非常に有意義だった。今回、タイ人学生と話したり、チュラーロンコーン大学で開講されている英語授業に参加したりする中で、タイと日本の大学生のさまざまな違いに気付くことができ、興味深かった。その一例を挙げると、タイでは大学生は学業第一で、アルバイトをしている人はほとんどいない。また、クラブ活動に参加している人も少ないようである。課題が多く、学外活動をする時間がないのである。このことから、勉強に対する大学生の意欲は日本よりも高いと感じた。さらに、共同発表の準備の中で、タイ人学生は発表に慣れているという印象を受けた。何かを調べたり、スライドを作成したりすることは、彼らにとって得意なことようだった。これら学内学習の他、学外研修も数回行われ、エメラルド寺院・ワット・ポー、アジアティーク、ゴ・クレットを訪れた。タイは上座部仏教が主であり、寺院や僧侶が日本とは全く異なる。エメラルド寺院やワット・ポーでは、日本と異なる仏教文化を目の当たりにした。アジアティークでは、ニューハーフショーを観劇した。このニューハーフショーは非常に華やかで観光客向けのものである。こうしたニューハーフショーが観光名物になっていることから、タイの性的マイノリティに対する寛容さを感じた。ゴ・クレットというのは川の中州で、陶器と王宮菓子で有名なところだそうだ。想像以上に観光地化されており、島を一周するように伸びる細い道に沿って観光客向けの屋台が立ち並び、タイのお菓子や陶器の品物がたくさん売られていた。

私が数ある SEND プログラムの中からタイのチュラーロンコーン大学サマースクールを選択したきっかけは、今年の春に SEND プログラムの一環で日本に来ていたタイの学生と知り合ったことである。その際に、タイ人学生の日本語能力の高さとフレンドリーさに感激し、次回の SEND プログラムでは是非タイに行きたいと考えていた。私はタイに行くのが初めてだったため、見るものすべてが新鮮だった。チュラーロンコーン大学のあるバンコクは、タイの中ではかなり都会で活気に満ち溢れている。しかしながら、街のいたるところに野良犬がいたり、歩行者用の信号がないことがあったりして、日本の都会とは全く異なる雰囲気だった。また、タイは王国なので、街のさまざまな場所で国王の写真を目にするし、毎日国王賛歌が流れると皆立ち止まる。そういうところから、異文化を肌で感じることもできた。2週間お世話をしてくれたタイ人学生は皆優しく、いつも私たちのことを気遣ってくれた。タイ料理を食べたいと言う私たちを毎日色々なお店に連れて行ってきて、まるでそうすることが当然かのように、夜遅くまで付き合ってくれた。日本で知り合った学生とも再会し、束の間だったが交流を深める機会を得ることができた。

今まで数週間程度の英語圏地域における語学研修には参加したことはあったが、英語を使うことが一般的ではない国に2週間も滞在したのは初めてであった。漠然とタイに行きたいと思っていただけだったが、このプログラムに参加してタイの歴史や文化を学び、また何よりも現地学生との交流の中で、さまざまなタイの魅力に気付くことができた。さらに、2週間にわたるタイ生活は、現地学生との交流によって一層充実したものになった。彼女たちのサポートがなければ成り立たなかったと思う。今回のプログラムでの経験から、今後もっと様々な国の学生たちと関わりを持ちたいと考えるようになり、他のアジア圏の国々や、日本に來ている留学生のお世話、彼らとの交流にさらなる意欲が湧いた。

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール

木野 結（文学部4年）

タイ語はこれまで学習したことがなく、今回のプログラムが初めてのタイ語経験であった。このプログラムの授業を通して、買い物の際に値段を聞いたり、簡単な自己紹介ができるようになった。日常生活ができるレベルとは到底言えないが、それでも、実際に店でタイ語を使ってみると、店員がうれしそうな笑顔を見せてくれ、また普段は日本語や英語でコミュニケーションをとっていたタイ人の友人たちも喜んでくれた。これまでの経験から、実際のスキルとしての言語の必要性は学んでいたが、今回のプログラムでは、相手の言語を学ぶことによるコミュニケーションの円滑化や、相手との距離の縮まりを実感することができ、言語学習の別の意味を見出すことができた。今後は、これに安住せず、生活していくうえでのツールとしてのタイ語も、もっと勉強していきたい。

イギリス留学をはじめとして、これまでも多くの海外経験があったが、欧米圏以外にはあまり行ったことがなく、今回のタイが2回目の（日本以外の）アジア滞在であった。バンコク市内の様子を見るだけでも、ハイブランドの店が立ち並ぶ大きなデパートと、その前の道に並ぶ市場や屋台の融合が新鮮で、バンコクの発展と、それへの社会や人々の適応が垣間見られた。一方、チュラーロンコーン大学というタイ随一のエリート校の学生と交流する中で、そうした発展していくタイ社会の中にある格差についても強く実感した。

1日3時間ずつのタイ語の授業を中心に、タイの文化や歴史、文学について英語や日本語で授業を受けた。タイ料理作りの体験では、これまでひたすら食べるだけだったタイの料理を作ることで、タイの人たちの生活や、その大きな一部分を占める食文化といった背景を垣間見ることができた。さらにこれらに加えて、私たちのための実地研修として、ワット・プラケーオ等の寺院見学の機会も設けられており、非常に充実した内容であった。特に、授業の一環としてチュラーロンコーン大学の日本語専攻の学生と行った共同発表は、双方のバックグラウンドの違い等もあり大変であったが、それらを乗り越えて共同で一つのものを形にするという点でよい経験ができたように思う。

私は、4月からの進路がすでに決まっており、今回のプログラムが進路の決定に影響を及ぼしたことはなかったが、先述のタイ人学生との発表およびその準備を通して、バックグラウンドの違い個人を一つのグループとしてまとめるという経験をすることができた。これは、4月からの新しい環境でも大いに役立つ経験であろうと思う。また、このプログラムを通して言語習得の楽しさや意義に気づくことができ、あと半年ほどの学生生活を、専門の研究と並行して言語学習にも費やしてみたいと考えるようになった。

2016年タイ・チューラーロンコーン大学サマースクールプログラム

康村 博宣（大学院法学研究科修士課程1年）

「日本は豊かな国なのに、どうして幸せを感じる人がそれほど多くないのか。」こんな疑問を耳にしたことがある。たしかに、物質的には恵まれているものの、過労やうつ病による自殺、教育現場での深刻ないじめ問題など、日本ではもはや珍しくなくなった社会問題は「幸福不感症」の源かもしれない。明るい未来、今まさに楽しい、という共通の価値観を人々が有していた高度経済成長期やバブル期と異なり、先行きの不透明な社会では、努力は美德という伝統的価値観さえゆらぎ、不安が人々の心を蝕むのだろうか。窮屈で閉塞的な思考から脱するには、異世界に飛び込むのが一番てっとり早い。

これまで海外への旅行も留学もそれなりに経験していたが、今回のように日本で親しくなった人たちと渡航先で再会し、現地を案内してもらったのは初めてのことであった。旅行ツアーでは行かないローカルなお店で食事をし、ショッピングセンターを縦横無尽に闊歩したり等、刺激的な経験ができたと感じている。特に修了式の後、タイ学生の誘いで美術館へ行き一緒に企画展示を見たときには、いわゆる接待ではなく、同じ目的の行為をもって同じ時間を共有しているという感覚があり、とても満たされた気持ちになった。

今回のプログラム内容は、二つに大別できるだろう。第一に、タイ語という言語に触れること。第二に、現地の学生と共同発表を行うことである。

タイ語は、ヨーロッパ系言語のような品詞の活用がないため文法は単純だが、特有の文字の読み書きを習得するのが厄介である。もっとも、日本語も外国人にはかなり難しい言語のようだが、日本語学科のタイ学生は高度に使いこなす者が多いと感心した。結局のところ、外国語の習得にはどれだけ本気で学ぶかという姿勢が重要な要素になっているように思われる。本プログラムにおいては、出発前にも事前学習の機会があり、「日常会話を習得し、現地で積極的に使用する」という姿勢で取り組んだ。タイ語の授業では、教師の発問に応答し、発表グループではタイ語で自己紹介することもできた。果物売りの名物おじさんと話せたのも嬉しい。ただ、修了式の際に、準備不足のため、日本語での総括になってしまったことが悔やまれる。加えて、タイ語で会話を続けて、少し込み入った議論を行うことが今後の課題となった。

共同発表に関しては、「道徳観の違い」というテーマをあらかじめ提案して、タイ学生との打ち合わせにのぞんだ。10日の間に計5回打ち合わせというタイトなスケジュールであったが、道徳観について様々な社会問題を事例として議論していくうちに、日本では規範やルールを、タイでは人間関係や人脈を優先する傾向があることに気づいた。もともと農村共同体社会から発展したという点では、日本もタイも共通しているものの、そのような価値観の違いが生じたことは大変興味深い。実際の発表や発表準備を通じて、グループとしては「外国人である一日本人の視点」を考察に加えたことにより活発な議論につながった。それをどうまとめて終結させるか、という難しさはあったものの、ひとまず一つの形として完成したことにより、グループとしての達成感が得られたことは間違いない。さらに、発表スタイルを共有したことで、各人の得意分野における理想的な研究プロセスを具体化でき、有意義だった。

さて、自分の進路に直接の影響があったかと問われると、すぐには答えられないが、ただ一つ関心を抱いたことがある。タイという社会がこれからどう変わっていくか。あるいは根本的なところでは何も変わらないのか。ぜひこの目でその姿を確認できたらと思う。

4 ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

4.1 実施体制

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学

(University of Languages and International Studies [ULIS],
Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Đào Thị Nga My	東洋言語文化学部・学部長
Phạm Thị Thu Hà	東洋言語文化学部日本語部門長
Nguyễn Huyền Trang	東洋言語文化学部日本語部門・講師

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学

(University of Social Science and Humanities [USSH],
Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Võ Minh Vũ	東洋学部日本学科・専任講師
------------	---------------

京都大学

実施責任者

伊藤 公雄	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授
平田 昌司	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット・教授

担当教職員

河合 淳子	国際交流センター・教授
稲垣 和也	アジア研究教育ユニット・特定助教

4.2 募集要項とポスター

S E N Dプログラム
2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールのご案内
Summer Intensive Course for Vietnamese Language and Culture 2016

申 込 締 切： 2 0 1 6 年 5 月 3 0 日 (月) 正 午

【日程】

2016年9月11日(日) ハノイ市到着
9月12日(月)～9月23日(金)：講義および研修(於ベトナム国家大学)
9月24日(土) 自由行動、出発
9月25日(日) 帰国

【プログラム概要】

本プログラムは、ベトナムにおいて最も先駆的なベトナム国家大学ハノイ校に属する人文社会科学大学および外国語大学において、ベトナム語学習および文化についての講義、ベトナム文化体験、ベトナム語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供する。ベトナムの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【募集詳細】

募集人数： 6名程度
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)
応募条件： 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者

【費用詳細】

学費： 20,000～30,000円(参加人数により変動)
航空券： 90,000～100,000円(参加人数により変動)
海外旅行保険： 約12,000円(AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」)
宿泊費： 約50,000円(参加人数により変動、2名1室利用が基本)
国内移動費等： 約50,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生する

【補助・支援詳細】

費用補助： 6名程度(約80,000円)
JASSO奨学金： 若干名(1名につき70,000円)
※ JASSO支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限る

【申込】

1. オンライン申請をおこなう(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 以下の書類(a-gは全員必須)をそろえ、下記の申請書類提出先に提出する
 - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
 - b. 応募申請書(書式1-1)
 - c. 語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - d. 成績証明書
 - e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4一枚程度)
 - f. 海外留学誓約書

- g. パスポート（入国時に有効期限6ヶ月以上のもの）の顔写真ページのコピー
（未取得者はその旨申し出、早急に取得）
- h. 収入に関する証明書（JASSO 申請者のみ。学部生は（両親の）世帯の収入、大学院生は、本人および配偶者の収入。申請条件、提出書類については応募申請書（書式1-1の3頁）を参照のこと）
- i. （任意）：語学試験（英語）のスコアのコピー

下記ホームページから、募集要項確認、オンライン申請、各種書類ダウンロードをおこなう。
 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasu.cpier.kyoto-u.ac.jp/>

申請書類提出先： 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 京都大学 教育推進・学生支援部
 国際教育交流課 交流支援掛 075-753-5407

選考： 書類審査および面接によりおこなう。

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 稲垣 和也 asean-send.6 * mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 （「*」を@に変更）

【募集・選考スケジュール】

申込締切： 2016年5月30日（月）12:00（正午）
 面接： 2016年6月3日（金）12:20-12:50
 6月8日（水）12:20-12:50
 上記日程のうち、1人10分程度
 （於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6）
 最終結果通知： 2016年6月13日（月）
 オリエンテーション： 2016年6月17日（金）12:10-12:50
 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6（出席義務あり）
 海外渡航のためのヘルスケア・安全教育に関する講義
 2016年7月予定（出席義務あり）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2016年度前期：火曜5限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・参加者全員に、治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づける。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」（アジア研究）の単位に充当されることがある。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれている。

募集説明会

日時：2016年5月23日（月）12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6（I-S6）

SENDプログラム (2016年度)

ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

Summer Intensive Course
for Vietnamese Language and Culture 2016

2016年9月11日 (日) ~ 9月25日 (日)



募集説明会 (申込不要)

日時：2016年 5月23日 (月) 12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6

【日程】

9月11日 (日) ハノイ市到着

9月12日 (月) ~ 23日 (木) 講義および研修 (於ベトナム国家大学ハノイ校)

9月24日 (土) 自由行動、出発

9月25日 (日) 帰国

【詳細】

- ・募集人数 : 6名程度
- ・募集対象 : 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属の者を優先する)
- ・応募条件 : 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者
- ・費用詳細 : 学費 20,000~30,000円 (参加人数により変動)
航空券 90,000~100,000円 (参加人数により変動)
海外旅行保険 約12,000円 (AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」)
宿泊費 約50,000円 (参加人数により変動、2名1室利用が基本)
国内移動費等 約50,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します
- ・補助支援 : 以下のとおり各種支援を行います。
費用補助 (約80,000円) : 6名程度
JASSO奨学金 (70,000円) : 若干名 ※ JASSOの支給要件を満たす者



【申込方法】

- ・申込み : 下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>
- ・提出先 : 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 京都大学教育推進・学生支援部
国際教育交流課 交流支援掛 075-753-5407

【締切日】 2016年5月30日 (月) 12時00分 (正午)

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子
アジア研究教育ユニット 稲垣 和也
asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp (「*」を@に変更)

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2016年度前期:火曜5限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・参加者全員に治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入を義務づけます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業(ASEAN諸国等との大学間交流形成支援)「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれています。



4.3 研修日程

2016 Vietnam In-Country Training

Period: 12th Sep-16th Sep (USSH) 19th September-23th September (ULIS)

Date	Time	Category	Curriculum/Event	Lecturer/Staff	Venue
Mon, 12th-Sep	9:30-10:00	SEND	オリエンテーション	Dr. Vo Minh Vu	C201 会議室
	10:00 - 12:00	授業参加	日本語 (日本語・ベトナム語)	Dr. Nguyen Phuong Thuy	C504 号室
	14:00 - 16:00	特別講義	ベトナム語 (1) (英語・ベトナム語)	MA. Vo Minh Ha	C201 会議室
Tue, 13th-Sep	9:00-11:00	特別講義	ベトナム語 (2) (英語)	MA. Vo Minh Ha	C201 会議室
	13:00 - 15:00	特別講義	Predict the Unpredictable: Rural Experiences of Late-socialist Marketisation in Northern Vietnam (英語)	Dr. Lam Minh Chau	C201 会議室
Wed, 14th-Sep	9:00-11:00	特別講義	Migration and Agricultural Production in a Vietnamese Village (英語)	Prof. Dr. Nguyen Tuan Anh	C201 会議室
	13:00 - 15:00	授業参加	日本の地理 (日本語・ベトナム語)	MA. Pham Hoang Hung	C504 号室
Thu, 15th-Sep	9:00-11:00	特別講義	文化遺産保護 (日本語)	Prof. Dr. Phan Hai Linh	C105 号室
	13:00 - 16:00	授業参加	日本語 (日本語・ベトナム語)	Dr. Vo Minh Vu	C104 号室
Fri, 16th-Sep	Whole day	実地研修	ドンラム村 (日本語ガイド付き)	TASS 会社	
Sat, 17th-Sep	Whole day		自由行動		
Sun, 18th-Sep	Whole day		自由行動		
Mon, 19th-Sep	9:00-9:30		オリエンテーション	MA. Nguyen Huyen Trang 交流に参加する ULIS 学生	A2 棟 60 号室
	9:30 - 11:30	特別講義	ベトナム語講座	MA. Nguyen Huyen Trang	A2 棟 60 号室
	13:50 - 15:40	授業参加	総合日本語 (2 年次 15J3) (日本語)	MA. Dinh Huong Hai	C1 棟 107 号室
	16:00 - 17:30	授業参加	会話 (2 年次 15J5) (日本語)	Dr. Bui Dinh Thang	A2 棟 602 号室
Tue, 20nd-Sep	8:30- 10:30	特別講義	ベトナム語講座	MA. Le Minh Hieu	A1 棟 509 号室
	10:40 -12:30	授業参加	異文化コミュニケーション (3 年次 J1 -J2) (日本語)	MA. Hoang Thu Trang	A2 棟 711 号室
	13:50 - 15:40	授業参加	総合日本語 (1 年次 16J1) (日本語)	MA. Trinh Thi Phuong Thao	C2 棟 107 号室
	16:00 - 17:30	授業参加	会話 (2 年次 15J1) (日本語)	MA. Kamiya Eri	A2 棟 602 号室
Wed, 21rd-Sep	Whole Day	実地研修	Trang An		7:30 ホテルロビー集合
Thu, 22th-Sep	7:50 - 9:30	特別講義	ベトナム語講座	BA. Vu Tam Dan	A1 棟 509 号室
	9:30 - 11:30	授業参加	通訳 (3 年次 14J4) (日本語)	MA. Hoang Phuong Lien	A2 棟 602 号室
	13:00 - 13:50	授業参加	作文 (2 年次 15J2) (日本語)	MA. Nguyen Thuy Ngoc	C1 棟 106 号室
	13:50 - 15:40	授業参加	読解 (2 年次 15J5) (日本語)	MA. Le Hong Van	A2 棟 604 号室
Fri, 23th-Sep	9:00 - 10:30		ULIS 日本語文化学部入学式に参加	BA. Vu Tam Dan	Nguyen Van Dao ホール
	10:30 - 12:00	SEND	日越学生交流、発表討論	MA. Pham Thu Ha, MA. Nguyen Huyen Trang, 学生	A1 棟 509 号室
	13:30- 15:00	SEND	日越学生交流、発表討論	MA. Nguyen Huyen Trang	A1 棟 509 号室
	15:00-16:00	SEND	発表討論、講評	MA. Nguyen Huyen Trang	A1 棟 509 号室
	16:00-16:30	SEND	修了式	MA. Nguyen Huyen Trang	A1 棟 509 号室
Sat, 24th-Sep				Hotel Check-out	DAHLIA HOTEL
Sun, 25th-Sep	0:05		Departure (VN320)		Noi Bai International Airport
	7:20		Arrival		Kansai International Airport

4.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	Name	所 属	学年
	山岡 翔	YAMAOKA SHO	大学院文学研究科	M1
◎	伊藤 勇太	ITO YUTA	経済学部	B4
	深谷 拓未	FUKAYA TAKUMI	総合人間学部	B3
	喜多 祐介	KITA YUSUKE	農学部	B3
	押村 亜沙美	OSHMURA ASAMI	農学部	B3
○	皆木 香渚子	MINAKI KANAKO	文学部	B2

4.5 ベトナム語会話教室

SEND プログラム 2016 年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール ベトナム語会話教室レポート

VU THACH THAO

京都大学総合人間学部交換留学生

2016 年 9 月 11 日から 9 月 25 日までの SEND プログラム「2016 年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール」の参加者が派遣前に京都大学で受けたベトナム語会話教室について報告する。このプログラムを担当した稲垣和也特定助教のはからいで、私がベトナム語教室の講師を担当した。京都大学吉田国際交流会館において、2016 年 9 月 1 日から 9 日までの間の 5 日間（1 日、6 日、7 日、8 日、9 日）の 1~2 限の時間を使い、6 名の日本人学生が参加した。ベトナム国について、そしてベトナム語初級会話・文法の理解を目的として、ベトナムについての総合的なイメージと初級レベルの簡単なベトナム語の会話練習を中心に実施した。具体的な内容は以下のとおりである。

第一回：ベトナム語の基本

1. ベトナム語の文字の紹介
2. 母音
3. 子音
4. 音調

ベトナム語を語学的に簡単に紹介し、文字の書き方・読み方、ベトナム語と日本語の違いについて説明した。

5. あいさつ
6. 自己紹介

基本の挨拶表現、自己紹介の表現について説明した。参加者は、これらの練習を繰り返し、一人ずつベトナム語で挨拶と自己紹介をおこなった。

7. 単語：よく使う簡単な単語リストを説明した。

第二回：会話①

前回の復習

1. 基本フレーズ：日常会話でよく使うフレーズ
2. 空港
3. ホテル

日常会話、空港、ホテルにおける典型的な会話をとりあげた。参加者は繰り返し練習し一つ一つの表現を覚えた。

第三回：会話②

前回の復習

1. よく使う動詞、形容詞
2. 移動
3. 観光地

基本的な動詞・形容詞、交通や移動、観光地における典型的な会話を取りあげた。
同じく、練習を繰り返し、努めて会話表現を記憶した。

4. 単語：会話のテーマに関する単語

第四回：会話③

前回の復習

1. レストラン

2. ショッピング

レストラン、ショッピングにおける典型的な会話を取りあげ、その練習と記憶に努めた。

3. 単語：会話のテーマに関する単語

第五回：会話④

前回の復習

1. 交流の場における典型的な会話を取りあげ、繰り返し練習をおこなった。

2. 基本単語：交流の場での会話に関わる単語について説明をおこない、あわせて、日常会話でよく使う基本単語を追加した。

使用した教材は欧米・アジア語学センターの「はじめてのベトナム語」と昭文社の「ことりっぷ 会話帖 ベトナム語」であった。この会話教室を通し、参加者はベトナム語での自己紹介とベトナム人との簡単な会話ができるようになった。その上、食生活、習慣、学校、社会、政府、ベトナム人の考え方等についても触れ、参加者が容易にベトナムのイメージを抱くことができるよう配慮し、参加者のベトナムへの関心が高まったといえる。これは、現地で SEND プログラムの目的を達成するための、渡航前に必要十分な準備だった。参加者全員、期待を胸にベトナムに行き、悔いを残すことなく帰国した。しかし、当然のことながら、今回の会話教室の内容については改善すべき事柄が見つかった。来年度もより良いベトナム語会話教室を実施できるよう、以下に、参考程度の私見を述べたい。

1. 会話教室の時間：

・連日の実施ではなく、復習と練習のために休みの日をはさむ。

・1 限と 2 限が連続すると参加者が疲れやすい。また、1 限からの開始では集中できない人もいる。

2. 教室外での交流：参加者の間で、また、参加者と講師の間で、教室外での交流や相談の機会を設ける。

3. プログラム担当の教員も会話教室に参加する。これは、稲垣和也特定助教が今回参加していたことから、参加者の意見も参考にして個人的に感じたことである。参加者はプログラムの意義を感じることができ、互いの信頼を高める効果が得られる。

4. 教材や教授内容の準備は、講師とプログラム担当者だけでなく、参加者の声も反映させる。

5. ベトナムに行ってベトナム語で会話することはもちろん、日本に戻ってもベトナム語とベトナムへの関心を抱き続けることが肝要である。プログラムに関わった全員が集まり、意見交換したり、さらに深くベトナムを知る機会を持ってほしい。

4.6 共同発表

日時： 2016年9月23日（金）PM
場所： ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 A1 棟 509 号室
担当教員： Nguyễn Huyền Trang（東洋言語文化学部日本語部門・講師）
稲垣和也（京都大学アジア研究教育ユニット・特定助教）

発表タイトル： 「日越食文化の違い -open closed-」

発表者： 山岡 翔 （京都大学大学院文学研究科修士課程1年）
伊藤 勇太 （京都大学経済学部4年）
深谷 拓未 （京都大学総合人間学部3年）
喜多 祐介 （京都大学農学部3年）
押村 亜沙美 （京都大学農学部3年）
皆木 香渚子 （京都大学文学部2年）

4.7 担当教員所感

2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール報告書

ヴォ・ミン・ヴ

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学東洋学部日本研究学科・講師

京都大学の先生方、学生の皆さん。

2016年7月31日から8月13日まで、人文社会科学大学は、京都大学が主催する京都サマープログラムに参加するため、京都大学に本学の学生3名を派遣しました。その後、2016 Vietnam In-Country Training プログラムおよび SEND プログラムの一環として、2016年9月11日から9月25日まで、京都大学の学生の皆さんを本学にて（期間：9/12～9/16）受け入れさせていただきました。



本学において、わずか1週間ですが、京都大学の学生に「ベトナム語の外来語」、「ベトナム語の声調」、「ベトナム語の人称代名詞」と題するベトナム語についての各講義、及び“Predict the Unpredictable: Rural Experiences of Late-socialist Marketisation in Northern Vietnam”、“Migration and Agricultural Production in a Vietnamese Village”、「ベトナムの世界文化遺産」と題するベトナムに関する各専門講義を聴講していただき、さらに国指定文化財として認定されている唯一の村である Duong Lam 村で学外研修していただきました。これらの活動を通じて、京都大学の学生の皆さんがベトナムらしさを自然体で実感していたことを確信しております。講義のほかに課外活動として京都大学の学生と人文社会科学大学の学生の間で活発な交流が行われました。

人文社会科学大学では、近年学生交流が増えつつあり、日本をはじめ世界からの学生を受け入れて、以前よりも多くの多様な国際交流プログラムが開拓され、充実してきております。異文化交流、そして異なる価値観をもった人々と意見を交わすことは、国際的な視野を広げ、将来自国と他国の交流に貢献でき、グローバルに活躍する人材の育成に資すると考えられます。このような意味で、今後、京都大学と人文社会科学大学との学生交流分野において、ますます有意義な交流プログラムが実施されることを期待しております。

どうもありがとうございました。

Võ Minh Vũ

Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn (Đại học Quốc gia Hà Nội)

Xin chào các giáo sư và các bạn sinh viên Đại học Kyoto

Từ ngày 31/7 đến ngày 13/8, trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn đã cử 03 sinh viên đến Đại học Kyoto để tham gia chương trình Mùa hè Kyoto do Đại học Kyoto tổ chức. Sau đó, trong khuôn khổ chương trình 2016 Vietnam In-Country Training và chương trình SEND (11/9-25/9), từ ngày 12/9 đến 16/9/2016, chúng tôi đã đón các sinh viên của trường Đại học Kyoto tới trường chúng tôi.

Tại trường chúng tôi, chỉ trong một khoảng thời gian ngắn ngủi 1 tuần, các bạn sinh viên Đại học Kyoto đã nghe các bài giảng chuyên đề về tiếng Việt như “Từ ngoại lai trong tiếng Việt”, “Thanh điệu tiếng Việt”, “Đại từ nhân xưng trong tiếng Việt” và các chuyên đề về thông qua các bài giảng về “Predict the Unpredictable: Rural Experiences of Late-socialist Marketisation in Northern Vietnam”, “Migration and Agricultural Production in a Vietnamese Village”, “Di sản văn hóa thế giới của Việt Nam”, đồng thời cũng đã đến thăm quan làng Đường Lâm, ngôi làng duy nhất tại Việt Nam được công nhận là di sản văn hóa quốc gia. Thông qua các hoạt động này, tôi tin rằng các bạn sinh viên Đại học Kyoto đã có những cảm nhận thực tiễn về Việt Nam. Ngoài giờ học, giữa sinh viên hai trường cũng đã có những hoạt động giao lưu sôi nổi.

Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, trong những năm gần đây, đã tiếp nhận nhiều sinh viên nước ngoài, trong đó có sinh viên Nhật Bản. Chúng tôi đã phát triển và ngày càng hoàn thiện nhiều chương trình giao lưu quốc tế đa dạng hơn. Việc giao lưu văn hoá, trao đổi ý kiến với nhiều người có giá trị quan khác nhau có ý nghĩa rất lớn đối với việc mở rộng tầm nhìn quốc tế, cống hiến cho giao lưu, trao đổi giữa đất nước mình với các quốc gia khác và góp phần đào tạo nguồn nhân lực có thể làm việc ở phạm vi toàn cầu. Với ý nghĩa đó, chúng tôi rất kỳ vọng sẽ có thể thực hiện nhiều chương trình giao lưu có ý nghĩa hơn nữa với Đại học Kyoto.

Xin trân trọng cảm ơn.

京都大学の SEND プログラムについて

グエン・フエン・チャン

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学東洋言語文化学部日本語部門・講師

京都大学の先生方及び学生の皆さん、

ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部の日本語講師グエン・フエン・チャンです。このたび 2016 年度の SEND プログラムに関わり、京都大学の学生との交流活動を行うことができ大変嬉しく思いました。本研修は、京都大学の学部生・大学院生が短い学修期間の中で本学のベトナム人学生との交流、ベトナム語講座、日本語授業参加、学生の専門性を活かした討論会、ハノイ観光など、大変有意義な経験をするのできるプログラムだと考えています。



2 週間にわたって、京都大学の学生の皆さんはいろいろな学習活動に参加しました。それらの活動を通して、皆さんの人柄の温かさを感じ、素晴らしいと感じました。研修初日にもかかわらずベトナム語で挨拶したり、ベトナム文化講座でたくさん興味深い質問をしたりする姿を見て、好奇心いっぱいの優秀な学生さんであることがよく分かりました。最終日の発表では、興味深いテーマを扱っていたこと、よく準備されたプレゼンテーションだったことなどから、京都大学は優秀な学生さんが集まる大学であることを窺い知ることができました。

いつも謙虚かつ親切で、周りの人への気配りを絶やさない皆さんの姿が非常に印象に残っています。本学の学生と積極的に交流してくれたおかげで、双方にとってたいへん有意義な交流の機会を得ることができました。特に、修了式当日の、学生達のアオザイ姿・ベトナムの伝統的盤上ゲームの共同体験・参加学生全員による写真撮影は忘れられない思い出です。

研修の計画段階から実施期間を通じて、京都大学の学生がハノイの大学生の日常、公共交通、文化生活、言語等の様々な面を実感することができるよう、プログラムにおける市内観光・交流活動の工夫に努めました。「陸のハロン湾」であるチャン・アンの旅を通して皆さんにベトナムの自然景観美と文化的価値を伝えたいという思いがありました。短期間の滞在でしたが、ベトナム語、ベトナム文化・社会、及びベトナムの人々について初めて抱いた印象をこれからも心に留めておいていただければと思います。

今回の研修については、京都大学の先生方と一緒に計画の段階から参加でき、京都大学の先生方の方で効果的な準備を進めていただいていたことが伺えました。さらに、学生のためにベトナムでの研修・交流プログラムを充実させようと、尽力しておられた先生方の熱心な姿に感服の念を抱きました。ハノイ国家大学外国語大学は国際交流を重視する教育機関として、今後とも、京都大学からの多くの学生の皆さんが本学での交流及び研修を目的として来学されることと、両校の協力関係がますます発展していくことを祈念しています。

Xin chào các thầy cô và các anh chị em sinh viên - Đại học Kyoto.

Xin gửi đến các thầy cô và các anh chị em sinh viên lời chào thân ái, nồng nhiệt nhất!

Tôi là Nguyễn Huyền Trang, giảng viên tiếng Nhật khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Nhật Bản, trường Đại học Ngoại ngữ- Đại học Quốc gia Hà Nội. Từ năm 2013 đến nay, với tư cách là người trực tiếp tham gia tổ chức, tôi rất vinh dự được gặp gỡ và tiếp xúc với các em sinh viên của Đại học Kyoto thông qua chương trình giao lưu trao đổi SEND. Đây là một chương trình trao đổi hết sức ý nghĩa thông qua các hoạt động như dự giờ học tiếng Nhật, các lớp học về văn hóa, hay trao đổi thảo luận với sinh viên Việt Nam, thăm quan thắng cảnh Hà Nội...

Trong hai tuần ngắn ngủi, cùng tham gia các hoạt động học tập với các em sinh viên của Đại học Kyoto, các em đã để lại cho tôi ấn tượng vô cùng tốt đẹp. Ngay từ ngày đầu tiên, nhìn thấy các em chào hỏi bằng tiếng Việt, hay đặt rất nhiều câu hỏi hứng thú quan tâm đến Việt Nam trong giờ giảng văn hóa, tôi nhận thấy sự xuất sắc và tinh thần ham học hỏi của các em rất rõ. Hơn thế, những chủ đề các em đưa ra cho buổi tọa đàm cùng với những bài thuyết trình phong phú đặc sắc lại càng khẳng định hình ảnh ưu tú, có năng lực của sinh viên trường đại học hàng đầu Kyoto.

Chúng tôi cũng hết sức ấn tượng với sự thân thiện, hòa đồng, khiêm tốn của các em sinh viên với bạn bè xung quanh. Các em sinh viên của khoa chúng tôi đã có thời gian giao lưu, trao đổi văn hoá rất thú vị với các bạn sinh viên Kyoto. Hình ảnh các bạn sinh viên Kyoto mặc áo dài trong buổi lễ trao giấy chứng nhận và cùng nhau chơi trò chơi truyền thống của Việt Nam, chụp ảnh lưu niệm với sinh viên Việt Nam sẽ là một kỉ niệm khó phai.

Bên cạnh đó, khoa NNVH Nhật Bản chúng tôi cũng luôn cố gắng tạo điều kiện tốt nhất để các em sinh viên ĐH Kyoto có thể trải nghiệm được cuộc sống và tìm hiểu con người Việt Nam thông qua những buổi tối thăm quan thành phố Hà Nội, cùng khám phá ẩm thực và đời sống sinh viên đại học với các bạn sinh viên Việt Nam. Chuyến đi Tràng An- danh thắng tự nhiên lâu đời của người miền bắc mong rằng sẽ đem đến ấn tượng về một đất nước thanh bình, với thiên nhiên tươi đẹp và giàu truyền thống văn hóa. Chương trình giao lưu tuy ngắn nhưng chúng tôi hi vọng rằng các em sinh viên cũng đã tích lũy được những hiểu biết ban đầu và về tiếng Việt, văn hóa Việt và xã hội - con người Việt Nam.

Được trực tiếp tham gia chương trình từ khi mới bắt đầu bàn bạc kế hoạch với các giáo sư của Đại học Kyoto, chúng tôi thấy rằng Đại học Kyoto đã chuẩn bị cho chương trình một cách bài bản và hiệu quả, cố gắng hết sức để các sinh viên có những ngày học tập - giao lưu tại Việt Nam thực sự có ý nghĩa. Với tư cách là một cơ sở giáo dục uy tín, chúng tôi mong rằng trong các năm tiếp theo, sẽ tiếp tục được đón nhiều sinh viên của Đại học Kyoto sang giao lưu, học tập tại Trường và mối quan hệ hợp tác giữa Đại học Kyoto và Trường chúng tôi ngày càng phát triển!

4.8 参加学生報告

2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

伊藤 勇太（経済学部4年）

私は本プログラムを通して留学したいという思いをより一層強くした。なぜならベトナムと日本では環境や人々の価値観が大きく異なっていたため、異文化交流という観点からは非常に興味深く、今後もこのような異文化体験を行いたいと考えているからである。例えば環境面では、公共交通機関が未発達なため、移動の手段が主にバイクとなっており、おびただしい数のバイクをみながら道路を横断したり毎日の交通手段がタクシーであったりした点に日本との違いを感じた。また、ベトナム人は家族のきずなを非常に大切にしており、自己紹介の中で家族構成の話をしたり、ベトナム人の家に伺った時に家族総出で出迎えていただいたりした点に価値観における相違点を感じた。派遣先大学での学習については、ベトナム語や文化についての学習がメインだったため、私の専攻分野である経済学とは直接的な関係がなく本プログラムが私の大学での学習に大きく影響を及ぼすことはなかったが、今後経済学を海外の大学で勉強する機会があれば今回の学習成果をぜひ活用したいという気持ちを強固にすることができた。国際理解の意欲もほかの項目と同様に強めていきたいと考えている。留学前はあらゆる事象を無意識のうちに自国の尺度で計っていたことに気づかされた。ベトナムでは一度計画されたスケジュールが柔軟に変更されることが多く、スケジュールに基本的に変更はないという日本の慣習に無意識に縛られていたため、ベトナムではスケジュールの変更に当初戸惑ってしまった。計画の順守性の差に違いがあったように感じたものの、どちらが良い悪いではなく単に慣習の違いとして受け入れようと努めたのもよい異文化経験になったと思う。

ベトナムでは現地の大学生と日本語でコミュニケーションを取る機会が多かったが、日本語のレベルは学生によって千差万別であったため、日本語学習歴がまだ浅い学生に対してはいかに難しい言葉を使わず会話をするか考慮することも多かった。その一方でベトナム語を使う機会を自らあまり作り出せず、ベトナム語を学ぶという目的には反していたため、今回の留学の反省点としたい。

本プログラムはベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学と外国語大学の二大学でそれぞれ一週間、ベトナム語講座やベトナムの文化にまつわる特別講座を受講したり、現地の学生が受ける日本語の授業に参加したりした。またハノイ近郊の村や世界自然遺産地への訪問などフィールドトリップも用意されており、ベトナムの農村や自然景観などを知るよい機会にもなった。

進路への影響は現在のところない。なぜなら私は本プログラム以前に就職活動を終え就職先が決定しており、入社予定の会社はベトナムで事業を行っていないため入社後もベトナムにかかわる機会はないからである。しかし今後同企業がベトナムへの進出を果たすならば本プログラムの経験を活かしてベトナム事業の一員として貢献したいという思いを抱いている。

ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

皆木 香渚子（文学部2年）

今回のプログラムに参加したことで、今まで文献から得ていた知識と実状とを結びつけることができた。例えば、ベトナムではインフラ整備が立ち遅れていると聞いていたのだが、交通事情と水回りの状態を知ることでそれらについて、身をもって感じる事ができた。まず、交通事情についてであるが、留学前に、ベトナムでの交通渋滞は激しいと聞いていたが、実際の渋滞状況は想像以上であった。幹線道路でも一般道でも絶えることなくバイクやタクシーが往来し、クラクションの音が四方八方から聞こえる。時速 20~30km で走行するのがやっとである。道幅の広い道路沿いを数分歩いただけで、すぐに目やのどが痛くなり、一緒に歩いていたベトナム人の友達はマスクが必須だと言っていた。また、水回りについてであるが、ハノイでは冬以外お風呂のお湯が出ないのは、ごく一般的であるとベトナム人の友人から聞いた。留学中に滞在したホテルでお湯が出ないことを不便に感じたが、ベトナム人にとって、夏場はお湯が出なくて当たり前なのであろう。ベトナムの水回りの話をしてくれた友人の「日本ではいつでもお湯が使えるから、みんな肌つやがいいのね。」という言葉がとても印象的であった。今回の留学によって、ベトナムで体験したインフラが未整備であることの困難さを解決したいと強く思うようになった。私は地理学専修に進むつもりであるが、地理学でインフラ整備の方法を学び、専門知識を身につけ、将来は途上国のインフラ整備に関わる仕事をしたいと思うようになった。また、今回実際に文献で得た知識を実感したことで、他の知識についても、実感を伴うものにしたいと強く思うようになった。もともと発展途上国に興味があるのだが、次回以降の SEND プログラムにも参加し、発展途上国に実際に赴いて、その実情を知るために留学したいと考えている。

今回のベトナムで最も痛感したのは、言語障壁の大きさである。現地で私たちの案内をしてくれたベトナム人の友人たちは、いくら日本語を学んでいるといっても、母語と同じように言いたいことを表現できるわけではない。日常会話で用いられる単語一つとっても、日本語で言うのは苦労しているように見えた。そのような時、もっと自分がベトナム語を話すことができれば、せめて単語くらいもう少したくさん覚えていればよかったのに、と悔やまれた。ベトナムでも英語は通じるだろうと高をくくって、ベトナム語の勉強量が不十分なまま留学してしまったことを後悔している。今後、留学の機会に恵まれることがあれば、せめて日常会話レベルの現地の言葉くらいは話せるようになるべきであると感じた。

プログラムの内容に関して、USSH での授業は興味深いものが多かった。特に英語の聴講の授業が面白かった。Lam Minh Chau 先生の農村部における市場経済への移行の授業では、ベトナムの経済発展の仕方の特徴や市場経済化による影響を豊富な写真付きで説明していただき、勉強になった。ULIS では、プログラムにかなり変更があったことなど、物足りなく感じる場合があった。どちらの大学でも、日本語の授業には「参加する」という形であったが、ほとんどの授業において、学生数人とフリートークをするに終わってしまったのが残念であった。さらにもったいないことに、ベトナム人も日本人も、相手の母語で自分の考えを伝えることも、相手の考えを聴いて理解することもできなかったのも、フリートークといっても、沈黙する時間も少なくはなかった。せめて、何について話すかあらかじめ決めておけば、双方とも事前に準備して、もう少し有意義な話ができただろうかと思った。事前に準備するといっても、そのディスカッションをするために必要となる単語を調べる、などの初歩的な準備でよいと思う。

上で述べた通り、ベトナムのインフラ環境を目の当たりにしたことで、発展途上国のインフラ整備に携わる仕事がしたいと思うようになった。大気汚染の程度や水回りの不便さに大きなショックを受けたからである。また、インフラ整備は自分の専門分野（地理学）が活かせると思っている。以上のことから、今回のベトナム留学は自分の将来の進路の方向を決定する大きなきっかけとなった点で、私にとって非常に有意義であった。

2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム

深谷 拓未（総合人間学部3年）

異文化理解において、最も重要なことは、やはり現地の人々との交流と現地の環境への順応ではないだろうか。今回のプログラムでは、大学主催の語学講座・文化講座・共同発表会・現地見学会に参加し、それぞれベトナムを知る上でとても有意義であったが、それ以上に現地学生との交流が私にとっては最も印象に残った。お互いに相手の文化に興味を持ち、多少の言語の障壁はあれ、いろいろな方法で自身の文化を伝えるだけでなく、相手の文化について少しでも深い理解をしようとしていた。そうした対話を通して、あらたな文化差を知りえ、更なる興味を感化されたことは言うまでもない。ハノイは近年急な経済発展と人口増加により、交通問題や環境問題は山積みである。インフラ整備が立ち遅れる状況での生活は、私たち派遣生にとって、多少なりとも不自由や不満を伴うことでもあった。しかし、事前の準備やその場での最善策を模索し、然るべき対応をして環境に順応していったことは、今後我々が各々別な海外経験をしていく上で有効に働くはずである。

私は文化人類学を専攻していることもあり、このプログラムはその調査方法の実践という意味も持ち合わせている。可能な限り現地の人々と交流し、現地の人々に似た生活をするように心がける。その中で文献調査や資料では決して発想し得ない文化の理解や文化に対する考察をするのであるが、私がそうした理想的な文化理解ができたとは言いがたく、特に観察と記録という面で足りないところがあったと認めざるを得ない。今後さらに文化人類学を継続し、いずれ本格的なフィールド調査をしていくことになるのだが、今回の調査経験を反省し、研究をよりよいものにしていきたいと考えている。

最後に、このプログラムに携わり、支援下さった大学の関係者の皆様に感謝したい。今回得た経験、友好関係を大切にしつつ、グローバルな分野で貢献していけるよう努力を重ねる次第である。

SEND プログラム ベトナム国家大学ハノイ校サマープログラム

押村 亜沙美（農学部3年）

今回のプログラムでは、9月12日―9月16日をベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学で過ごし、9月19日―9月23日をベトナム国家大学ハノイ校外国語大学で過ごした。人文社会科学大学ではベトナム語講座、ベトナムに関する文化講座を受講し、現地学生の日本語授業に参加した他、校外学習としてドウオンラム村に行った。また、外国語大学ではベトナム語講座の受講、現地学生の日本語授業への参加、日越共同発表、校外学習として景勝地チャンアン観光を行った。

ベトナム語講座は、ベトナム語の発音練習から始まり、基本会話の習得までを行った。ベトナム語の発音は日本語の発音とは大きく異なるため、正しく発音することはとても難しい他、ベトナム語には声調が存在し、トーンを間違えただけで違う意味になってしまうので、1つの言葉を習得するだけでも多くの時間を要した。また、これらの難関により、ベトナム語講座を受講したものの、実社会でベトナム語を使うことはとても難しかった。しかし、自分のベトナム語が相手に通じたときはとても嬉しく感じた。

また、ベトナム語講座、ベトナムに関する文化講座を通じて、ベトナム人の考え方やその歴史的背景などが分かり、とても面白かった。特に、文化財や言語などは中国的な影響を受けているものが多いにも関わらず、現在のベトナムでは領土問題などもあり、中国に良い感情を持っていない人が多いということは印象的であった。また、ベトナム経済発展の方法も興味深かった。ベトナムの発展方法は、大都市に全てを集約する中国のような方法ではなく、農村地域も潤しながら全体的に発展させようとするため、GDPが上がりやすく、発展が反映されにくいということであった。このことから、現行のGDP換算では都市集約型の発展方法が優遇される形になっていることがわかり、ベトナムのような方法が評価される新しい尺度が必要であると感じた。

今回のプログラムで、人文社会科学大学と外国語大学の2大学にお世話になった。派遣前は、なぜ日本語学習者が2つの大学に分かれて在籍しているのだろうかと思議に思っていたが、実際に大学に行くことにより、大学としての目的や学生の雰囲気が大きく異なることに気付いた。最初に訪問した人文社会科学大学は、日本について研究するために日本語を学習している様子であり、日本語学習の際にも日本に関する題材をよく用いている印象を受けた。また、日本学科は1クラスのみで少人数のため、先生が一人ひとりの学生をよく把握していると感じた。そして、一番驚いたことが、宿題を忘れた際の罰金制度である。これは、宿題を忘れた学生から一人5000ドンを徴収し、徴収したお金は学期末のパーティーで使うという制度である。日本の大学では、学期末のパーティーすらないので、考えられない制度であるが、アットホームな学風を生かした制度であり、とても面白い取り組みだと思った。そして、一方の外国語大学は日本語学習者を約600人要しており、日本語教育現場としてとても規模が大きいという印象を受けた。教育内容も日本語学習にとても力を入れており、体系的に学習する制度ができていると感じた。しかし、学生数が多すぎるせいか、教室変更がとても多く、また、先生が学生を把握しきれていないため、学生が不便を被っていると思った。しかし、両大学ともに共通していたことが、学生の日本語習得への意欲の高さや日本への興味深さであり、日本語で必死に私に話しかけてくれる姿には胸を打たれた。

また、現地で生活して印象に残ったことは、交通事情と家庭についてである。

まず、交通事情に関して、ベトナムのバイクの多さについては派遣前から聞いていたものの、実際に現地へ行くと予想以上の多さに驚かされた。ベトナムでは、ほとんど信号や車線がないため、車やバイクが非常に自由に走っている印象を受けた他、クラクションを鳴らす

頻度が極端に高いと感じた。しかし、長距離列車以外には電車が存在しないハノイではバイクが市民の足となっており、多くの学生もバイクを使って登校している。人文社会科学大学でお世話になった先生曰く、10年あまりの間に複数人の学生をバイク事故で無くしているそうである。学生達は当たり前のように、バイクを乗りこなしているものの、朝と晩の交通渋滞はとてひどく多少なりとも危険を伴う上に、空気も汚染されているため、とてもストレスが溜まり、事故の確率が上がりそうだと感じた。友人たちには安全運転に心がけてもらいたいと思った他、彼らが安全に登下校できるような便利な公共交通機関ができるといいと思った。

今回のプログラム参加期間中に、ベトナム人の友人の家にお邪魔させて頂く機会が3度あった。その中で驚いたこととしては、家の立地、もてなし方、家の開放性が挙げられる。まず、家の立地としては、今回お邪魔した3軒共、乗用車が入ることのできない程細い道に面しており、大通りからは、小さな路地をくねくねと何度も曲がらないといけな場所にあった。ハノイ市内の古くからの建物が立ち並ぶ地域では、間口の狭い建物が所狭しと並んでいるが、これは住宅街においても同様であり、近隣住宅と密接しているのが印象的であった。そして、もてなし方はどの家においてもとても盛大であり、驚かされた。毎回、友人のご家族の方が、食べきれない程の料理や果物を用意してくださった他、あるお宅ではご家族全員と一緒に食卓を囲むことになった。日本では、子供の友人を家に招く時には、母親などはおやつや飲み物などの準備のみをした後は、子供たちの話に水を差さないように鳴りを潜めてしまうことが多いと思うが、ベトナムでは、言葉の通じない相手に対してもご家族の方がとても友好的に接してくださって、少し驚いたがとても嬉しかった。また、どのお宅も物理的に開放的であり、外気温30℃程の中、エアコンを使わずに、風を通して、とても強力な扇風機を使う習慣がある他、近所の人々が友人の家の外に設置されているテレビを観ていたり、ふらっと家の中に上がってきたりと、日本では信じられないような開放的な風習があり、とても興味深かった。

去年のSENDプログラムでタイに派遣させて頂き、その際は是非将来東南アジアで仕事がしたいと思った。そして、今回のベトナムへの派遣を通して、その思いは強くなったものの、ベトナムではインフラや衛生面の関係から、私が長期で滞在することは、まだ少し難しいと感じた。私は将来、化学メーカーや食品メーカーで東南アジアへの進出に関わる仕事をしたいと思っている。今回のベトナム滞在を終えて、まだ菓子や化粧品以外での日本の食品メーカーや化学メーカーの認知度はベトナムではあまり高くないと感じた。しかし、ベトナムでは普及していないが、あったら便利だと思われるものが多く存在すると感じ、日本企業の進出メリットがあると感じた。学業を終えて就職する際には、今回得た知見なども生かしていけたらいいと思う。そして、その頃には、ベトナムのインフラや衛生面が、ベトナムの開放的な特徴を壊さない程度に改善されていることを祈りたい。

ベトナム滞在中には、多くの現地学生による助けを受けて、無事にプログラムを終了することができたと感じる。勉学で忙しい中、私たちの要望に応じて一緒に食事をしたり、遊びに連れて行ってくれたり、プログラムの変更に迅速に対応してくれた友人たちに感謝したいと思う。

また、今回のベトナム派遣は私にとって3回目のSENDプログラムを通じた派遣となった。シドニー、バンコク、ベトナムと様子の異なる3都市に2週間滞在することによって、各国の様子を掴み、文化を理解することができた他、各国の日本語学習者と出会い、彼らと友好を深めることができたと感じている。また、他国から自分の住む日本という国を客観的に見ることで、今まで先進国の背中を追ってきた日本は、他の後発国など諸外国から学ぶべきことが多いと思うようになった。このような貴重な経験をさせてくださったSENDプログラム関係者全てにお礼を申し上げたいと思う。

2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマープログラム

喜多 祐介（農学部3年）

派遣プログラムは2週間という短い期間ながら、日本語とベトナム語を通して現地の学生と交流するというものでした。交流をおこなったのは、ベトナム国家大学ハノイ人文社会大学とベトナム国家大学ハノイ外国語大学で日本語、若しくは日本文化などを専門とする学生であり、それぞれの大学に1週間ずつお世話になりました。具体的な内容としては、現地の大学の日本語や日本文化に関するクラスへの参加とベトナム語やベトナムの社会・文化に関する特別講義の受講で、日本語のネイティブスピーカーとして日本語を教えた他、こちらもベトナムを理解するために簡便ではありますがベトナム語を学習するという機会が設けられていました。その他にはベトナムの伝統を今に残すドンラム村の様子を実際に見学し、世界遺産登録がなされているチャンアン複合景観を訪れるというフィールドワークもありました。本プログラムの参加を通して得られた学習成果には、一つ目として非常に限られた時間でベトナム語を勉強し、ベトナム人とベトナム語を介してコミュニケーションをとれるという状況にすら至れたかも怪しいですが、私個人としては語学(殊にアラビア語)にとっても興味があるため、声調を用いた言語を学ぶということが面白いことであることに面白と感じたことも多く、また学ぶべきことも多かったと感じた点です。二つ目としては、日本語に関してですが、日本語話者として日本語を第二外国語、若しくは第三外国語としてベトナムの生徒とコミュニケーションをとることを通して、どのようにしたらこちらが伝えたいことが上手く伝わるか、という点で非常に勉強になった点です。ノンバーバルコミュニケーションはもちろんのこと、いかにして私たちが普段使っているレベルの日本語をわかりやすい単語やフレーズに置き換えるか、というのが最も興味深くそして勉強となった点であり、今回のプログラム最終日前日に行ったベトナム国家大学ハノイ外国語大学での日本語を用いたプレゼンテーションではそのことが多少なりとも活かせたと感じています。

海外での経験に関しては、以前から発展途上真っ只中の国をどこか訪れてみたいと考えていたので、現在急激な成長を迎えているベトナムを訪れる本プログラムは、私にとって非常に魅力的でしたし、実際に行ってみてわかったこと、日本との違いが各所に散見されたことが非常に興味深かったです。得た経験の中で最も貴重だったのは、実際に現地のベトナム人の自宅に訪問し、食事をすることができた、ということにつきると思います。これは本プログラムで交流をしたベトナム人生徒の有難いまでのもてなしの心によるもの、としか表現できませんが、実際に生徒宅を訪問し、ベトナムの生活風景と食生活を間近に見ることができたのは非常に大切な経験だったと思います。またベトナム人学生たちには観光客ならまずわからないような裏路地にある店舗なども紹介していただき、よりベトナムに密着した14日間を送れたと感じています。また実際にベトナム国家大学の生徒に対してベトナムに来てから疑問に感じていたことを実際に質問することができた(ただし学生は日本語や日本文化に比較的親しみを持っているというフィルターがあるので一概にベトナム人全体の意見として捉えるのは危ういのは承知の上でしたが)のも非常に面白かったです。

残念ながら今回のプログラムが直接的に私自身の進路に関わることはありません。しかし、日本語や日本文化を学ぶベトナム人の方々と交流できたことで、将来日本と関係をもつ人がこの中から多く出てくると思いますし、どのような形になるかはわかりませんが、どこかで何かしらの関わりが生まれるかもしれないことを考えると非常にいい経験になったと思います。現在私は京都大学農学部森林科で勉強し、専攻としては木造文化財研究をしようと考えています。ベトナムも仏教国ということでお寺が多く存在しており、今回はその一部しか拝見できませんでしたが、木造建築という観点からすると非常に興味深いものも多く、またベトナムの一般家庭で用いられている家具類も木製のものが多かったので、森林科専攻としては非常に面白いものを見ることができたと感じています。

最後にベトナムで日本語を学ぶベトナム人学生との交流を通して一番心に残ったのは、ベトナム人学生たちの日本語運用能力の高さもそうですが、間違いをおそれずに積極的に日本語を用いてコミュニケーションをしようとする姿勢そのものでした。無論今回交流した現地学生は日本のことを勉強している人達ですから、何かしら日本に対していいイメージを持っている方が多いのは承知していますが、しかしこの姿勢自体は見習うべきところが多く、現在英語とアラビア語を勉強している身としては非常に語学学習のモチベーション向上につながるいい機会になったと思います。

2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム

山岡 翔（大学院文学研究科修士課程1年）

本プログラムは、現地の日本語学習者との交流、提携校での授業参加、共同発表、課外活動等を通して、互いの国の文化的理解・国際的理解を深める、という趣旨のものであった。現地の大学では現地学生のための日本語の授業の補助及び派遣者のための人文学系講義への参加のほか、農村部の視察も含んでいる。今回訪問した大学はベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学（USSH）及び外国語大学（ULIS）である。課外時間は主に現地学生との交流、観光、及び共同発表の準備等に充てられた。

本プログラムにおいて得られたことは大きく分けて次の2点である。まず、異なる文化を持つ人々との交流を通して、自国の文化をある程度相対化することができるようになったということ。そしてもう一つは、生のベトナム語に触れることができたということである。まず前者に関して、文化は（当然のことであるが）我々人間の生活の様々な面に反映される。そういった文化の反映に関して、自国での生活においてはあまりに当然過ぎていちいち考えることはないが、実際に異なる文化の国に身を置いてみると、そういった反映を生身で感じることであり、自国との相違や類似が強く意識される。こういった文化の相互比較及び相対化ができたということは私にとって大きな経験であった。しかし、歴史背景・風俗慣習などに関する背景知識が十分ではなかったため、そういった文化の違いを生んだ要因を分析・考察するまでには至らなかった点が反省である。次に後者に関して、私は言語学を専門としており、特にベトナム語の音声について深い関心があったため、最近1年間はベトナム語の学習に力を入れていた。しかし、実際にベトナムに行った経験はなく、日本に滞在中のベトナム人との交流も非常に限られるため、ベトナム人の話す生のベトナム語に触れたり、運用したりする機会は非常に少なかった。そのため本プログラムにおいて、実際に使用されている生のベトナム語に触れたり、自分のベトナム語能力を試したりすることにより、言語的・語学的関心を大いに深めることができた。しかし、現地の学生の日本語学習の障害とならないように意識しすぎたこと、運用の面での失敗を恐れてしまったことなどから、ベトナム語の運用や言語学的な観察・分析を十分にできなかった点が反省である。

また、そのほか海外で得られた経験としては、音楽に関する経験がある。私は元来言語学のほかに音楽にも非常に関心があった。ベトナムには宮廷音楽や民謡等の伝統音楽が数多く残っており、そのうち無形文化遺産に登録されているものも少なくない（ただし、日本と同様に欧米諸国の大衆音楽も相当に流入しており、伝統音楽を圧迫しているというのが現状のようであるが）。本プログラムの実施期間中、私は実際にそういった伝統音楽の鑑賞に行ったり、現地の学生に質問したりすることで、ベトナムの音楽に関する興味を深めることができた。また、ベトナムの音楽文化に触れることで、自国の音楽文化について再考する機会も得られた。

最後に、本プログラムが私の進路に与えた影響に関して、私は上でも述べた通り、元来ベトナム語の音声に興味があったため、このベトナムという地を自分の研究のフィールドにするつもりで本プログラムに参加した。その結果、この地をフィールドにしようという意思がより頑健になるとともに、今後の研究において非常に重要な鍵となるであろう現地の人々とのつながりをも得ることができた。また、今後ベトナムに留学することも以前から検討していたが、今回その留学先の候補である大学を実際に訪問することができた。そのため、本プログラムは私の研究・進路において非常に有用であったと考えている。

5 インドネシア大学スプリングスクール

5.1 実施体制

インドネシア大学 (University of Indonesia [UI])

実施責任者

Leli Dwirika

Indonesian Language Program (BIPA) Manager,
LBI, Faculty of Humanities

Tantriana Widyaningsih Elfrida

Marketing Manager, LBI, Faculty of Humanities

担当教員

Himawan Pratama

Lecturer, Faculty of Humanities

京都大学

実施責任者

伊藤 公雄

大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

平田 昌司

大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット・教授

担当教職員

河合 淳子

国際交流センター・教授

稲垣 和也

アジア研究教育ユニット・特定助教

5.2 募集要項とポスター

SENDプログラム
2017年インドネシア大学スプリングスクールのご案内
Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture 2017

申込締切：2016年12月8日(木)正午

【日程】

2017年2月19日(日) インドネシア、デポック市到着
2月20日(月)～3月3日(金)：講義および研修(於インドネシア大学)
3月4日(土) 自由行動
3月5日(日) 帰国

【プログラム概要】

本プログラムは、インドネシアで最も古くに設立された伝統ある高等教育機関のインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供する。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【募集詳細】

募集人数： 7～10名
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・
アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)
応募条件： 異文化体験・異文化学習に高い意欲を持つ者

【費用詳細】

学費： 75,000～90,000円(参加人数により変動)
航空券： 76,000～86,000円(参加人数により変動)
海外旅行保険： 6,300円
宿泊費： 20,000～35,000円(参加人数により変動、ゲストハウス2名1室が基本)
国内移動費： 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生する

【補助・支援詳細】

費用補助： 7～10名程度(1名につき70,000～100,000円：参加人数により変動)
JASSO奨学金：若干名(1名につき70,000円)
※ JASSO支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限る

【申込】

1. オンライン申請をおこなう(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 以下の書類(a-gは全員必須)をそろえ、下記の申請書類提出先に提出する
 - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
 - b. 応募申請書(書式1-2)
 - c. 語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - d. 成績証明書
 - e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4一枚程度)
 - f. 海外留学誓約書

- g. パスポート（入国時に有効期限6ヶ月以上のもの）の顔写真ページのコピー（未取得者はその旨申し出、早急に取得）
- h. 収入に関する証明書（JASSO 申請者のみ。学部生は（両親の）世帯の収入、大学院生は、本人および配偶者の収入。申請条件、提出書類については応募申請書（書式1-2の3頁）を参照のこと）
- i. （任意）：語学試験（英語）のスコアのコピー

下記ホームページから、募集要項確認、オンライン申請、各種書類ダウンロードをおこなう。
 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>

申請書類提出先：吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階

国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2488

選考：書類審査および面接によりおこなう。

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 アジア研究教育ユニット 稲垣 和也

【募集・選考スケジュール】

申込締切： 2016年12月8日（木） 12:00（正午）
 面接： 2016年12月14日（水） 12:10-12:50、16:30-18:30（講義室4）
 12月15日（木） 12:20-12:50、16:30-18:30（講義室6）
 上記日程のうち、1人10～15分程度
 いずれも於 吉田南構内 吉田国際交流会館
 最終結果通知： 2016年12月19日（月）
 オリエンテーション： 2017年1月11日（水） 12:10-12:50
 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室4（出席義務あり）
 海外渡航のためのヘルスケア・安全教育に関する講義
 2017年1月予定（出席義務あり）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2016年度後期：火曜2限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・参加者全員に、治療・救済者費用無制限の学研災付帯海外留学保険「プランD」への加入を義務づける。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」（アジア研究）の単位に充当されることがある。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれている。

募集説明会

日時：2016年11月30日（水）12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室4 (I-S4)

SENDプログラム (2016年度)

2017年インドネシア大学スプリングスクール Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture 2017 【補助金・奨学金付】

【日程】

出発日：2017年2月19日(日)

帰国日：2017年3月5日(日) (2週間)

説明会：2016年11月30日(水) 12:10~12:50 @ 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室4



【プログラム概要】

インドネシアで最も古くに設立された伝統あるインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供します。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流の場が得られます。

【詳細】

- ・ 募集人数： 7~10名
- ・ 研修内容： インドネシア言語文化講義、学生交流、実地研修、発表討論
- ・ 募集対象： 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・ 費用： 学費； 75,000~90,000円 (参加人数により変動)
航空券； 76,000~86,000円 (参加人数により変動)
海外旅行保険； 6,300円 (学研災付帯海外留学保険「プランD」)
宿泊費； 20,000~35,000円 (参加人数により変動、学内ゲストハウス2名1室が基本)
国内移動費等； 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。
- ・ 補助支援： 以下の通り各種支援をおこないます。
費用補助； 70,000~100,000円 (7~10名程度；参加人数により変動)
JASSO奨学金； 70,000円 (若干名)
※ JASSOの支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限ります。

【申込方法】

- ・ 申込み： 下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>
- ・ 提出先： 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2488

【締切日】 2016年12月8日(木) 12時00分(正午)

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
アジア研究教育ユニット 稲垣 和也

【備考】

- ・ 同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・ 国際高等教育院提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2016年度後期：火曜2限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 参加者全員に治療・救済費用無制限の学研災付帯海外学「プランD」への加入を義務づけます。
- ・ 本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムは、大学の世界展開力強化事業(ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援)「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれています。



5.3 研修日程

Universitas Indonesia Spring School 2017

19 FEB - 5 MAR 2017

Date	Time	Activity	Lecturer/Staff	Place
Sun, 19 FEB	12:00	Departure (GA889)	Kazuya Inagaki (KU)	Kansai International Airport
	17:20	Arrival		Soekarno-Hatta International Airport
	19:00-23:00	Pick-up, Airport - Guest House	BIPA, Sukojadi Prasnowo	Soekarno-Hatta International Airport
		Dinner		@ KFC Lenteng Agung
		Check-in		PSJ Guest House
Mon, 20 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Sukojadi Prasnowo	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	14:00-16:00	Indonesian Culture Class (Gamelan)	BIPA	BIPA (room 9110)
	16:00-18:00	Final Presentation Preparation	Kazuya Inagaki (KU), Himawan Pratama	BIPA (room 6306)
	from 18:00	Daily necessities for students	Himawan Pratama	Margo City Depok
Tue, 21 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Sukojadi Prasnowo	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6306)
	13:30-15:30	Indonesian Culture Class (Arumba)	BIPA, Rih Gumilang	BIPA (room 9111)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6306)
Wed, 22 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Desrillia Handoyani	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Desrillia Handoyani	BIPA (room 6306)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Thu, 23 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6305)
	16:00-18:00	Final Presentation Preparation	Kazuya Inagaki (KU), Himawan Pratama	BIPA (room 6113)
Fri, 24 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	14:00-16:00	Indonesian Culture Class (Batik)	BIPA	BIPA (room 9102)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Sat, 25 FEB	9:00-18:00	Study Tour to Taman Mini Indonesia Indah	BIPA & Student Tutors	Taman Mini Indonesia Indah (Jakarta)
Sun, 26 FEB		Free		
Mon, 27 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Sukojadi Prasnowo	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	13:30-15:50	Japanese Drama	Aldrie Alman / Citra Rindu Prameswari	Faculty of Humanities (room 4303)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Tue, 28 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Sukojadi Prasnowo	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6306)
	13:00-16:00	Japanese Discourse Analysis	Lea Santiar / Himawan Pratama	Faculty of Humanities (room 1203)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Wed, 1 MAR	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Desrillia Handoyani	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Desrillia Handoyani	BIPA (room 6306)
	14:00-17:00	Basic Japanese A	Endah H. Wulandari	Faculty of Humanities (room 6107)
	from 17:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Thu, 2 MAR	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Ellis Artyana	BIPA (room 6306)
	from 16:00	Final Presentation Preparation		BIPA (room 6113)
Fri, 3 MAR	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA, Wili Sandra	BIPA (room 6306)
	13:00-14:45	Certificate Presentation Ceremony	BIPA	Gubug Makan Mang Engking Depok
	15:15-18:00	Final Presentation	Himawan Pratama / Kazuya Inagaki (KU)	Faculty of Humanities (Auditorium 1)
Sat, 4 MAR	12:00	Check-out (Group 1)	Kazuya Inagaki (KU)	PSJ Guest House
	18:00	Check-out (Group 2)		
	18:00-20:00	Pick-up, Guest House - Airport	BIPA	
	23:40	Departure (GA888)	Kazuya Inagaki (KU)	Soekarno-Hatta International Airport
Sun, 5 MAR	8:15	Arrival	Kazuya Inagaki (KU)	Kansai International Airport

5.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	Name	所 属	学年
	光村 麻衣子	KOMURA MAIKO	大学院文学研究科	M2
◎	中尾 梨奈	NAKAO RINA	経済学部	B4
	深谷 拓未	FUKAYA TAKUMI	総合人間学部	B3
○	茂絆 真奴	MOHAN MANU	文学部	B3
	濱 希望	HAMA NOZOMI	文学部	B3

5.5 インドネシア語会話教室

インドネシア語会話教室報告

Tiwuk Ikhtiari

京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程3年

SEND プログラム（2016 年度）の 2017 年インドネシア大学スプリングスクールの実施に先立って行われたインドネシア語会話教室のチューターを担当しました。受講生たちの中には、インドネシア語を勉強したことがある学生、インドネシア語の挨拶程度を知っている学生、インドネシア語を全く知らない学生もいました。私にとって、とても挑戦的だと感じるクラスでした。

五日間（2017 年 2 月 8, 10, 13, 15, 16 日）、短い期間にインドネシア語の簡単な挨拶、会話など自信を持って発話すること、リスニングに慣れることを目指しました。日常会話でよく使うパターンも紹介し、インドネシア語の能動態および受動態（書き言葉）も導入しました。最初のディクテーションでは、c, é, h, k, ng, r, といった文字が聞き取れていなかったり、他の文字での代用がありましたが、最終のディクテーションでは、クラスで繰り返し使用された単語に慣れ、的確に文意をつかめるようになり、殆んど間違いなく書き取ることができました。とても感動しました。

覚えた単語が増えるにつれ、会話の練習時には、だんだん積極的に 1, 2 箇所を他の単語で言い換えたり、自発的に話を付け加えたりすることができました。分からないことがあれば、気後れすることなく質問してくれました。皆さんの質問から、現地で何を話したいのか、インドネシア人に何を訊きたいのかということがわかり、私も勉強になりました。

最後の授業でインドネシアのテレビ番組（トークショー）を見てもらいました。自己紹介を含む冒頭の 3 分程度のシーンでした。それによって、インドネシアのテレビ番組、インドネシア人の顔や服装、インドネシア語の会話の速さ、ジョーク、その雰囲気などを感じてもらうことができましたと思います。

最終の授業で、いろいろな場面の会話の練習がしたいと、皆さんから提案してもらいました。動詞の導入時に、会話練習の量が減ってしまったので、今後このような会話教室の担当の際には、会話練習の頻度について改善すべきだと感じました。貴重な提案を頂き、感謝しています。

2017 年インドネシア大学スプリングスクールを通じて、皆さんが異文化を同等の文化と見なし、不思議に思い、その特殊性や真新しさに感動し、様々な事柄を学ぶことでしょう。それと同時に、自分自身と向き合い自分自身と格闘しながら人間性を高めることで、さらに豊かな資質をそなえてくれると信じています。最後に、インドネシア語－日本語の翻訳や日本語のチェック、授業中いつも皆さんと一緒に会話練習に参加し、テクニカルサポートをくださった稲垣和也先生にも感謝を申し上げます。

5.6 共同発表

日時： 2017年3月3日(金) 15:15-18:00
場所： インドネシア大学(デポックキャンパス) 人文科学部 第1棟大講堂
担当教員： Himawan Pratama (インドネシア大学人文科学部・講師)
Rouli Esther (インドネシア大学人文科学部・講師)
Filia (インドネシア大学人文科学部・講師)
稲垣和也 (京都大学アジア研究教育ユニット・特定助教)
司会進行： Himawan Pratama (インドネシア大学人文科学部・講師)

1. 「我ら、大豆一族！～日本とインドネシアの大豆食比較～」
発表者： 深谷 拓未 (京都大学総合人間学部3年)
Irayna Putri (インドネシア大学人文科学部、アイナ)
コメンテーター： Filia、稲垣和也
2. 「学校におけるいじめ問題」
発表者： 濱 希望 (京都大学文学部3年)
Afif Windy Septiansyah (インドネシア大学人文科学部、アラタ)
コメンテーター： 稲垣和也、Rouli Esther
3. 「日本/インドネシアで働きたい？」
発表者： 中尾 梨奈 (京都大学経済学部4年)
Tiara Darmashanti (インドネシア大学人文科学部、ティアラ)
コメンテーター： Rouli Esther、Filia
4. 「固有種 動物 現状と保護：相手国から学べる保護の改善点」
発表者： Manu Mohan (京都大学文学部3年)
Fachri Adam (インドネシア大学人文科学部、カチェ)
コメンテーター： Filia、稲垣和也
5. 「インドネシアと日本の伝統芸能」
発表者： 光村 麻衣子 (京都大学大学院文学研究科修士課程2年)
Gilang Girih Samudra (インドネシア大学人文科学部、ギラン)
コメンテーター： 稲垣和也、Rouli Esther

5.7 担当教員所感

2017年インドネシア大学スプリングスクール

ヒマワン・プラタマ

インドネシア大学人文科学部日文学科・講師

2017年度スプリングスクールを一言で表しますと、「楽しかった！」です。本学でのスプリングスクールは2年ぶりとなりましたが、本年度も共同学習や、毎日の触れ合いを通じて、京都大学の学生とインドネシア大学の学生の間で充実した交流ができたと感じております。

本年度のスプリングスクールは、一昨年度と同様、プログラムを大きく二つに分けることができます。それは「インドネシア語及び文化の紹介」と「学生共同学習」です。前者は Lembaga Bahasa Internasional Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya Universitas Indonesia（インドネシア大学人文科学部国際言語センター）によって運営され、そのプログラム内容は「インドネシア語講座」、「インドネシアの伝統芸能の紹介」、それから「タマン・ミニ・インドネシア・インダーへの学外研修」等を射程に入れていました。これらのプログラム内容を通して、インドネシア語・インドネシア文化を紹介するための様々な授業が行われました。2週間という限られた時間の中で、京都大学の学生たちは習ったことを見事に身につけ、インドネシア社会に接する色々な場面において授業などで得た言葉や文化の知識を積極的に活かしていました。

もう一方のプログラム内容は「学生共同学習」です。これは、両大学の学生が友情を深めながら、インドネシアと日本の様々な共通点あるいは相違点についての知識を増やすことを目的とし、インドネシア大学人文科学部日文学科の下で行われました。ここで両大学の学生が二人組に分かれ、自分たちで決めたテーマについて発表するというのがメインの内容でした。発表準備のため、プログラムの実施中はもちろんのこと、実施期間以前から学生達はSNSを用いて活発に意見交換をしていました。このような共同学習の成果として、非常に良い発表が実現したということだけでなく、両大学の学生の友情あるいは絆がより深まったと信じております。インドネシア大学と京都大学の両学生はより多くのことお互いから学ぶことができました。

最後に、インドネシア大学を代表しまして、本年度も大変充実した学生交流の機会を与えていただきました京都大学に心よりお礼を申し上げます。この機会に築いた友情は私たちにあって一生の宝になるでしょう。



Universitas Indonesia Spring School 2017

Himawan Pratama

Pengajar Program Studi Jepang,
Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya, Universitas Indonesia

“Sangat menyenangkan” adalah kata yang paling tepat untuk menggambarkan seluruh rangkaian acara Spring School di Universitas Indonesia pada tahun 2017. Kami sangat berbahagia dapat kembali menjadi tuan rumah bagi rombongan mahasiswa Kyoto University, dan menyelenggarakan berbagai kegiatan bersama yang tentunya sangat berkesan dan menambah wawasan baik bagi mahasiswa Universitas Indonesia maupun mahasiswa Kyoto University.

Sama seperti kesempatan sebelumnya, secara garis besar Spring School di Universitas Indonesia dibagi menjadi dua, yaitu pengenalan bahasa dan budaya Indonesia, serta kegiatan belajar bersama mahasiswa. Kegiatan pertama dikoordinir oleh Lembaga Bahasa Internasional Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya Universitas Indonesia, yang di dalamnya meliputi kelas bahasa Indonesia, kelas pengenalan kesenian Indonesia (gamelan, arumba, dan membatik), serta tur ke Taman Mini Indonesia Indah. Meski dalam waktu yang relatif singkat, kelima mahasiswa Kyoto University mampu menyerap materi-materi yang diberikan dengan sangat baik. Hal yang paling mengagumkan adalah bahwa para mahasiswa Kyoto University dengan sangat aktif mengaplikasikan hal-hal yang dipelajari di kelas untuk keperluan sehari-hari. Salah satunya adalah dalam berkomunikasi dengan masyarakat Indonesia di sekitar mereka. Kemauan mereka untuk terus mempelajari hal-hal tentang Indonesia serta berinteraksi dengan masyarakat Indonesia, baik di kelas maupun di luar kelas, adalah faktor yang menambah efektivitas program-program belajar yang diselenggarakan.

Jenis kegiatan berikutnya adalah kegiatan belajar bersama mahasiswa yang dikelola oleh Program Studi Jepang Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya Universitas Indonesia. Di dalam kegiatan ini kelima orang mahasiswa Kyoto University dipasangkan dengan lima orang mahasiswa Universitas Indonesia untuk membuat presentasi mengenai sebuah tema dalam bahasa Jepang. Untuk mempersiapkan presentasi tersebut, mahasiswa telah saling berkontak melalui SNS bahkan sebelum kedatangan rombongan Kyoto University ke Universitas Indonesia. Selama program berlangsung pun, hampir setiap hari selama program berlangsung para mahasiswa berkumpul untuk mendiskusikan rencana presentasi mereka. Interaksi yang intensif yang terjalin di antara mahasiswa kedua universitas tidak hanya menghasilkan presentasi yang sangat baik dan menarik, namun juga berperan dalam membangun persahabatan yang erat di antara mahasiswa. Mahasiswa Universitas Indonesia dapat belajar lebih banyak mengenai Jepang melalui mahasiswa Kyoto University, dan begitu pula sebaliknya.

Sebagai penutup, mewakili Universitas Indonesia saya ingin menyampaikan rasa terima kasih atas kunjungan rombongan Kyoto University. Saya percaya bahwa persahabatan yang terjalin di antara mahasiswa Kyoto University dan Universitas Indonesia melalui program Spring School 2017 merupakan modal yang sangat berharga dalam menjalin hubungan harmonis di antara Indonesia dan Jepang.

5.8 参加学生報告

2017年インドネシア大学スプリングスクール

中尾 梨奈（経済学部4年）

インドネシア滞在を通じて、世界における日本の立ち位置を再認識することができた。例えばインドネシア大学の学生からは（日本学科の学生との交流が主だったからかもしれないが）日本企業で働くことへの憧れを強く感じ、日本が依然として先進的地位にあることを認識した。一方で韓国や中国、アメリカの存在感も大きく、今後は二国間だけで物事を語るのは難しく、マルチな協力と影響を考慮しなければならないのではないかと考えさせられた。

本プログラムでは、40時間の初級インドネシア語講義により、基本的なインドネシア語を習得することができた。アラビア語・ヒンディー語・マレー語などに由来する語が9割を占めると言われ、比較的近代的な概念では英語に由来する語も多く散見される。インドネシア語から、インドネシアの多様性を感じることができた。インドネシア語の授業では、時折英語の補足が入りつつも基本的に簡単なインドネシア語で、配布された教科書に沿って進行していた。全体として、ライティングやリーディングよりも、スピーキングと実践を重視した内容であった。

文化体験として、1週間目にはガムラン、アルンバ、バティックの体験が行われた。実際に手を動かして演奏・作業することに重きが置かれていた。2週目には、“Japanese Drama”, “Japanese Discourse Analysis”, “Basic Japanese” の授業をインドネシア大学の学生に混ぜて受講した。これらの授業はインドネシア語で進められた。

2人1組（日本側1人&インドネシア側1人）がペアになってそれぞれの興味に従った内容について調査し、最終日にプレゼンテーションを行った。またペアの学生及び他の日本学科生には昼食時や休日に同伴してくれる学生も多く、有意義な交流を行うことができた。

イスラームの思想・習慣との接触が最も印象的な経験である。このスプリングスクールに参加する以前、私はイスラームに対し多くの日本人同様「豚肉とアルコールは摂取禁止、女性はヒジャブを被り肌を隠さねばならない」程度の知識しかなかった。しかしインドネシアでのイスラームは私の想像以上に自由度が高く、お祈りの頻度や服装がどのような信念を持っているかによって異なるということを今回のスプリングスクールで実感を持って伺い知ることができた。

これまでこのような交流プログラムで様々な経験を積みさせてもらう側であったが、今後は国際交流プログラムをサポートする側になりたいという思いが強まった。まずは昨秋参加した東南アジア青少年の船の現地サミット（YLS）へのボランティアスタッフなど、今後の勤務予定地である東京での国際交流プログラム等のボランティアを務めていきたいと考えている。特に海外青年の日本滞在サポートに興味があり、生活基盤を安定させた後にはそちらへ積極的に関わっていきたい。

2017年インドネシア大学スプリングスクール

濱 希望（文学部3年）

世界最大のイスラーム国であるインドネシアに行くということで、宗教上のタブーや決まりがたくさんある厳しい国なのでは、と緊張していましたが、実際に訪れてみて、イスラームの教えを守っている人々が多いけれども他の宗教や非ムスリムにも寛容な国だと感じました。しかし、レストランや食堂には豚肉や酒がないところが多く、また知り合ったほとんどの人がムスリムで毎日祈りの時間に礼拝場所へ行って礼拝をしており、毎日の生活の中に色濃く表れているイスラームの習慣について多く目にすることがありました。それらは、法事などの折にしか宗教というものを意識することのない私にとってとても新鮮なものでした。私たちが宗教のことについて率直に尋ねても、インドネシア大学の友人たちは嫌な顔せず丁寧に教えてくれました。このように宗教について触れ、考えたことによってより視野を広げることができたと思います。デポックやジャカルタの町は車や人が多く、圧倒されそうなほどの活気を感じましたが、一方で小さな子供が道端で物を売っていたり、電車の窓からスラムの町が見えたりといった面もありました。

プログラムの大きな目的はインドネシア語の学習とインドネシア人学生とペアになったのプレゼンテーション発表でした。インドネシア語の学習については毎日3時間の授業を受け、休み時間の買い物などでインドネシア語を積極的に活用するようにしました。プログラムの中盤、日本語初級の授業に参加する機会があり、そこではインドネシア語から日本語へと、私たちとは逆のことが行われていて興味深く参加しました。日本についての授業に参加した際、第二次世界大戦時や現代の日本について学生たちが意見を述べており、現代における日本の政治的立ち位置について明言する学生たちの率直さにドキリとしました。プレゼンテーションについてはとても大変でした。ペアの学生は日本学科の学生で、お互いに意思疎通を日本語で行っていたため、日常会話については問題なく会話できていましたが、プレゼンテーションなど難しい内容になるとはっきりとお互いの意思を伝えることがとても難しく感じました。さらに、彼らが日本について言葉だけでなく社会や文化に関する事柄もよく知っていたのに対し、私はインドネシアについてほとんど知らなかったので申し訳ない気持ちになりました。しかし、毎日顔を合わせて根気よく話し合い、お互いの国のことについて、言葉の苦勞がありながらも話し合った時間はとても有意義なものになりました。大変だったぶん発表が終わった時には二人で大きな達成感を得ることができました。

このプログラムでは多くのインドネシア大学の学生たちにお世話になりました。彼らは自分たちも授業などで忙しいなか、毎晩おすすめのインドネシア料理を教えてくれたり、放課後や土日には買い物や観光に連れていってくれたりしました。彼らの優しさを忘れず SENDプログラムの受け入れ側に携わるなどして何とか恩を返していきたいと思いました。また、このプログラムでさまざまな京大生と出会えたことで学校生活や将来のことなどたくさんのお話をすることができました。このプログラムは多くの新しい考えや人々に出会わせてくれた、自分にとってとても有意義なものであったと思います。

2017年インドネシア大学スプリングスクール

深谷 拓未（総合人間学部3年）

タイ・ベトナムに続き、プログラムの参加も3回目となり、自分の中で東南アジア諸国を体系的に捉えるようになってきたという印象を持っている。いずれのプログラムにおいても、各々の国の環境・教育制度・価値観の差はあれ、同じ年代の学生との交流は大学レベル・個人レベルでとても価値があると確信している。

今回のプログラムの内容は、初級インドネシア講座、伝統文化体験、授業参加、現地見学、共同発表およびその準備である。いうまでもなく、休憩時間や週末などに現地学生と交流できた。

今回は特に、派遣先大学のプログラムの組み立てやマネジメントもさることながら、前2回のプログラムの反省を活かしたこともあり、共同発表およびその準備は円滑かつ充実していた。派遣前の現地学生との連絡の取り合いや準備に始まり、派遣期間中の平日に十分な議論の時間が持てたことにとっても満足している。そうした議論を通して、発表内容以外にも、教育制度・学習環境についても情報交換ができ、両国の差を実感することができた。

現地の人々と交流することは私の最大の楽しみであることは間違いないが、文化交流というものが自分の置かれてきた文化・環境を相対化することでもあるという点をこれまで以上に意識するようになった。今回の派遣では、自分自身の日本文化や日本語に関する知識が乏しいことや、相手の文化（多くは宗教に関すること）に関する知識を備えていなかったがために、違和感や自然な交流を妨げてしまい、口惜しさを感じたことが幾度かあった。ムスリムに関係する様々な規範に沿わないことがしばしばあり、私自身知らず知らずのうちに他に迷惑をかけてしまっていた。もちろん、あまりに一般化した文化解釈や、個人レベルの理解の範疇を超えた発言には注意しなくてはならないのだが、我々が日々当たり前前に遭遇する些細な文化的事象に対する関心とそれに対する文化的解釈の方法が欠けていたと反省している。というのも、会話のなかでの確かな発言ができなかったり、即座に適切な行動ができなかったりし、後になって言うべきだった内容やとるべき行動を思いつくということがしばしばあったからである。ただし、このような出来事によって文化の一端への着目と分析を徐々に洗練させることができたように思う。今後の学術研究の領域に限らず、異文化に接触する機会は多くあるであろうが、常に自他の文化に目を向け、大小数々の障壁を乗り越えた高度な文化的相互理解を促進・実践してゆきたいと思っている。

今後も専門である文化人類学の研究に励んでいくつもりである。このような志を抱きながらも、私と同年代の現地学生が自立に向けて努力している姿を見て、緊蹙一番の思いである。さらに、今回のインドネシア大学スプリングスクールで得られた人的関係や文化体験を、自分の勉学や自分自身が国際的な場で生きてゆくための土台にしてゆきたいと思っている。

2017年インドネシア大学スプリングスクール

光村 麻衣子（大学院文学研究科修士課程2年）

今回のプログラムで得た学習成果は大きく分けて語学と文化・歴史の学習があります。本プログラムは2017年2月19日から3月5日までの2週間の短期研修でした。平日はデポック市にある国立インドネシア大学にて午前1コマ100分のインドネシア語の授業を一日2コマ履修し、午後には文化体験の授業や、インドネシア大学の授業に参加した後、毎日2時間ほど共同発表の準備を行いました。インドネシア語はこれまで未学習でしたが、本プログラム参加前の事前講習を踏まえ、毎日の語学の授業を受講することで、基本的な日常会話程度の語学力を身につけることができました。特に私はインドネシア語の巻き舌の"r"の発音が苦手だったのですが、本プログラム中の猛特訓により、習得することができました。また、英語については、授業やペアワークでインドネシア語が通じないときに英語を解することが時々あり、単語の意味を英語で話すことがあったので、英語の会話力も上達したように思います。

文化体験の授業では、インドネシアの伝統音楽であるガムラン、アルンバの体験、伝統的な染物であるバティックの体験を行いました。その他、日本語の談話分析の授業や、日本のドラマ・漫画に関する授業、一般教養としての日本語の授業に参加しました。土曜日にはタマン・ミニという施設でインドネシアの建築や歴史を学び、日曜日にはジャカルタ市内の観光を行いました。授業や普段の生活を通して自分で見聞きし、体験することでインドネシアの歴史・文化について、学ぶことができました。

さらに、授業以外の生活から学んだことも多くあります。これまで体験したことのない地域、気候、文化の国で、またこれまでで最も長い期間海外に滞在したことで、授業以外の普段の生活から多くのことを感じ、学びました。インドネシアではあまり英語が通じないことから、言葉が通じない不便さを実感するとともに、何とかして少ない語彙で意思疎通を図ろうと日々奮闘し、必然的に短期間で日常会話を身につけることができました。また、生活習慣など、たくさんの違いを普段の生活から知ることができました。一番印象に残ったのは、宗教の違いです。インドネシアはイスラム教を信仰する人が多く、生活リズムや服装、食事など多くの違いがあります。また、人によって決まりの解釈や習慣が違います。これまで当たり前だと思っていたことを見直し、それぞれの人の考え方や習慣を尊重し、気遣うことの大切さを学びました。また、日本から見たインドネシアについてだけでなく、インドネシアから見た日本についても少し知ることができました。

今回の研修を通して、今後働いていくうえで必要な国際的な感覚や問題解決能力を身につけられ、より国際的に活躍したいと感じるようになりました。宗教や労働の仕方、進路の違いから自分の固定観念を疑い、相手を理解しようとする意識は今後、海外だけでなく国内で働いていくうえでも必ず役立つものであると感じています。また、ペアワークを行うなかで、言語の壁、考え方の違いを乗り越えて一つのアイデアにまとめ、そして外国語話者の方にも伝わりやすい発表を作り上げるというプロセスの中からコミュニケーション能力・問題解決能力が向上しました。また、私は4月から化粧品会社の研究職で働くことが決まっていますが、今回インドネシアにおける美的感覚やサービスに対する考え方の違いを強く感じ、興味を持ちました。国内で研究するだけでなく、東南アジア諸国におけるより良い商品展開について今後研究したいと考えています。

今回のプログラムは2週間という短い期間でありましたが、語学・文化をはじめ、書ききれないほどに多くのことを学ぶことができました。しかし、そのどれもが、あくまできっかけをいただいたというものであり、これからどのように学び続ける努力をするか、どのように生かすかはすべて私自身にかかっていると感じます。就職後もこの研修から得たことを無駄にしないよう、努力を続けていきたいです。最後に、このような機会をいただいたことに、心より感謝いたします。

2017年インドネシア大学スプリングスクール

モハン マヌ（文学部3年）

このプログラムに参加した主な理由は京都大学で開講されている語学科目の「インドネシア語」を一年間履修していたからです。本プログラムの渡航に先立って、予備語学教室が5日間おこなわれました。その講師はインドネシアの方だったので直接インドネシアの方と知り合う機会にもなりました。この先生の教え方は非常に優れていて、内容も分かりやすかったと思います。応用力を必要とする授業で、授業内容が現地での日常会話の際に非常に役に立ちました。

インドネシアに着いたばかりの頃は不慣れな通貨でのやりとりに戸惑っていましたが、数日後にはその戸惑いが嘘だったかのように現地通貨を使いこなすようになりました。そして、インドネシア語を勉強／練習することができてとても嬉しく思っています。言語を通してインドネシアの文化や人間性の理解にも繋がったのでインドネシアの人々の心が以前よりも理解できるようになった気がします。現地の友達を作ることができたのは大きな収穫です。これからも互いの成長を応援し合い、積極的に協力し合っていきたいと思います。私が努力して日本に留学できたのと同様に、今回出会ったインドネシアの大学生が先進国である日本での修学の機会を得て視野を広げられるようになることを期待しています。私の留学経験、奨学金の情報、日本に対する情熱等について意見交換し、交流することができたので互いに応援し合う機会になりました。このような交流を通して、世の中というものは自分の知識や交友関係によって全く別物に見えるということを今回の経験から改めて学び直すことができました。インドネシア大学の学生達は賢い方が多く、一緒に行動／活動したことで私の勉強不足を反省したくなりました。もっと努力しなければならぬと思わせる機会にもなりました。インドネシアに行って多くのことに気づきました。まず、現地の女子学生たちは、ヒジャブを被っていながらもファッションやアクセサリーに敏感であるということ。特に女性は色あわせや化粧品などに関心が高く、日本の化粧品会社が戦略的に進出すれば、新たなサービスを提供できる可能性が高いと感じました。また、私がインドの国立大学に在学していた経験と照らし合わせると、インドネシアのインフラや SNS 事情がインドより発達しており、大学の授業においても、現代の日本の事情に敏感な若手の講師が多く、講義もアップデートされているという印象を受けました。

今回のプログラムに設定された共同発表という「試練」により、交流の時間と一つの目的に向かって励む機会を得られたことは有難いと思います。しかし、発表や交流の時間が多過ぎると感じることもあり、結果的に安心する時間が少なく、ストレスが重なり続けていたことは否めません。体験授業に関しては、バティックや伝統音楽のガムランやアルンバは楽しく、異国の文化に直接触れることができ脳神経を刺激する貴重な時間でした。バティックは私の故郷であるインドの染物文化に似ていたもので、その技術に関することを詳しく調べてみたくなりました。Taman Mini Indonesia Indah という文化センターを訪れた際、ガムランは

バリに別種が存在すること、その別種のガムランには特有の素晴らしさがあること、インドネシアの歴史や王国に関するさまざまな知識、イスラム教や法律制度の差があること等について、案内して下さった先生の助けを借りて勉強することができました。別の日に、学生さんと一緒に歴史博物館や記念館などに行く機会が得られ、インドネシアの歴史についてさらに学ぶことができました。教会を訪れた際、モスクが対面して立地しており、相互に出入り禁止にはなっておらず、精神的に緊張感があっても話し合うことで仲良く共存できているという事から、まさに世俗的な社会事情を映し出していると思いました。インドネシア語の「ありがとう」や「すみません」についても、インドネシア語の先生が説明してくれた通り、重要なニュアンスを持っている言葉であり、国民の文化の一部を反映していると思いました。感情や人情、つまり人の存在や気持ちを大切にしていることを理解できたと思います。

僕にとって、インドネシアの方々だけでなく、長期間日本人と一緒に行動することも初めての経験でした。このことについても国際的な学習の一つになったと思います。部屋を共有した京大生は割と気さくな人柄で、ほとんど気を遣う必要がなかったことに感謝しています。集団行動を重んじる日本人らしさや細かいところまで気にかけて言動を決めるという点が素晴らしいと思いました。加えて、スケジュールや安全性を重視しながらも、時間を最後まで効率よく使い切ろうと努力していたのが感動的でした。しかしながら、常にこのような行動様式を維持していたら疲れるかもしれないと思うときもありました。

全体的に見ると、私はインドネシアが好きになりました。修学や観光の機会を使って是非ともまた訪れたいと思っています。ただ、発展途上国で生まれ育った僕にとっては東南アジアよりもオーストラリアやヨーロッパのような文化差の大きい場所を訪れたほうが異文化に関する発見が多いかもしれません。とはいえ、文化差が大きければそれだけ馴染みにくく、悩んだりホームシックになる可能性が高いため、このようなプログラムへの初めての参加としては、東南アジア、インドネシアが適当だったと思っています。留学中の留学という貴重な体験でもあり、参加することができて良かったと感じています。

SEND プログラム 2016 年度派遣実施報告書

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール
ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール
インドネシア大学スプリングスクール

平成 29 (2017) 年 3 月発行

編集・発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)
京都大学国際高等教育院 (ILAS)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 田中プリント
電話 (075) 343-0006